

東金市玉崎神社裏横穴群(2)

— 東金市田間2地区土砂災害防止事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成26年3月

千葉県教育委員会

とう がね し たま さき じん じゃ うら よこ あな ぐん
東金市玉崎神社裏横穴群(2)

— 東金市田間2地区土砂災害防止事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —





ST-009 女室



ST-008・009・012 出土遺物

序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの業務内容に加え、平成 25 年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 3 集として、東金市田間 2 地区土砂災害防止事業に伴って実施した東金市玉崎神社裏横穴群（2）の発掘調査報告書です。今回は、台地斜面に掘り込んだ古墳時代の墓である横穴 6 基を発掘調査しました。横穴からは鉄刀、鉄鏃などが豊富に出土し、副葬された状態が良好に確認されました。副葬品の年代から横穴形態の変遷が裏付けられ、山武地域における古墳時代終末の歴史を知るうえで貴重な成果が得られました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として、多くの方々へ広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関に心から感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月

千葉県教育委員会
文化財課長 湯浅京子

凡 例

- 1 本書は、東金市田間2地区土砂災害防止事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を取録したものである。遺跡名の末尾の(2)は第2次調査を示している。
玉崎神社裏横穴群(2) 東金市田間 22146ほか (遺跡コード 213-028(2))
- 3 発掘調査は平成24年度に千葉県山武土木事務所の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が行い、報告書作成に至る整理作業は平成25年度に千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は以下の通りである。

平成24年度 発掘調査

公益財団法人千葉県教育振興財団

調査研究部長 関口達彦

調査2課長 橋本勝雄

発掘調査期間 平成25年2月1日～同年3月22日

調査担当者 上席文化財主事 黒沢 崇

平成25年度 整理作業

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 湯淺京子

発掘調査班長 蜂屋孝之

整理作業期間 平成25年10月1日～平成26年1月31日

整理担当者 上席文化財主事 黒沢 崇 内容：水洗注記～報告書刊行

- 5 本書の執筆・編集は黒沢 崇が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、東金市教育委員会、千葉県県土整備部河川整備課、千葉県山武土木事務所ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記の通りである。

第1図 東金市発行 1/2,500 東金市地形図 其20・28 昭和58年を縮小編集

第2図 参謀本部陸軍部測量局作成 1/20,000 迅速測図「東金」

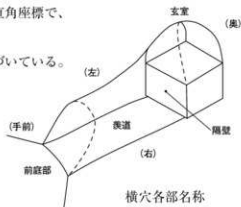
第4図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「東金」平成22年を縮小編集

- 8 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

- 9 土器等の観察表に記載した色調は「新版標準土色帖」に基づいている。

- 10 横穴の各部名称の凡例は右図の通りである。

なお、須恵器実測図断面は黒塗りとした。



本文目次

巻頭図版

序 文

凡 例

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 事業の経緯と経過	1
2 調査の方法と経過	1
第2節 遺跡の位置と周辺横穴	8
第2章 遺構と遺物	10
第1節 遺 構	10
第2節 遺 物	21
第3章 総 括	28

写真図版

抄 録

挿図目次

第1図 周辺地形図 (S=1/5,000).....	2	第12図 ST-014.....	20
第2図 迅速測図による 周辺地形図 (S=1/20,000).....	3	第13図 出土遺物 (1) <土器・玉・鉄製品>.....	22
第3図 調査対象横穴位置図 (S=1/300).....	5	第14図 出土遺物 (2) <鉄製品>.....	23
第4図 周辺の横穴の分布.....	6	第15図 出土遺物 (3) <銭貨>.....	24
第5図 調査区横穴の平面・立面分布.....	9	第16図 東上総地域の古墳と横穴分布図.....	29
第6図 ST-007.....	11	第17図 横穴復元平面・断面図.....	30
第7図 ST-008.....	13	第18図 横穴復元計測値比較グラフ.....	31
第8図 ST-009.....	15	第19図 東上総地域の無高壇横穴 (1).....	33
第9図 ST-010.....	16	第20図 東上総地域の無高壇横穴 (2).....	34
第10図 ST-011.....	17	第21図 横穴周辺地形と遺跡の位置関係.....	35
第11図 ST-012.....	19		

表目次

第1表 周辺の横穴一覧表.....	7	第5表 鉄製品計測表.....	26
第2表 遺構一覧表.....	9	第6表 銭貨計測表.....	27
第3表 土器観察表.....	25	第7表 横穴復元計測表.....	31
第4表 玉計測表.....	25		

図版目次

巻頭図版1 調査区全景・ST-009

巻頭図版2 ST-012・出土遺物

図版1 遺跡周辺空中写真 (S=約1/10,000)

図版2 調査区遠景

図版3 調査区全景

図版4 ST-007 (1)

図版5 ST-007 (2)

図版6 ST-007 (3)

図版7 ST-008 (1)

図版8 ST-008 (2)

図版9 ST-008 (3)

図版10 ST-009 (1)

図版11 ST-009 (2)

図版12 ST-009 (3)

図版13 ST-010

図版14 ST-011 (1)

図版15 ST-011 (2)

図版16 ST-012 (1)

図版17 ST-012 (2)

図版18 ST-013・014 (1)

図版19 ST-014 (2)

図版20 台地頂部・調査状況

図版21 出土遺物 (1)

図版22 出土遺物 (2)

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 事業の経緯と経過

千葉県県土整備部では土砂災害予防計画に基づき、土砂災害の未然防止と被害の軽減を図るため危険箇所の実態を調査し、災害防止策を講じている。そのうち急傾斜地崩壊対策として、急傾斜地崩壊危険区域を指定し、危険度の高い箇所から順次計画的に被害防止工事を実施している。玉崎神社裏横穴群の所在する東金市田間地区は平成11年に急傾斜地崩壊危険区域指定地とし、今回、急傾斜地土砂災害防止事業を実施することとなった。

その災害防止事業の計画を受けて平成21年度に、千葉県山武地域整備センター（当時）が「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会へ提出した。千葉県教育委員会では現地踏査を行い、同年度に「玉崎神社裏横穴群」が事業地内の一部に所在する旨を回答した。そして、事業地内の遺跡の取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、切土工事にて横穴が影響を受ける部分については、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

平成23年度には、すでに入口が開口し、所在の明らかとなっていた事業地内の6基の横穴について、(公財)千葉県教育振興財団文化財センターが発掘調査を実施し、その成果は平成24年度に発掘調査報告書¹⁾として刊行した。その後、現地工事の進捗により、事業地内で新たに横穴が発見されたため、再度関係機関による現地協議を行った。最終的に、発掘調査可能な計6基について平成24年度末に(公財)千葉県教育振興財団文化財センターが調査を実施した。そして、平成25年度に、この発掘調査成果について千葉県教育庁教育振興部文化財課が整理作業を行い、今回の報告書刊行に至った。

2 調査の方法と経過

発掘調査 調査にあたり発掘調査の対象となった横穴に対し、平成23年度調査での呼称を踏襲してST-007から遺構番号を付し、現地調査の記録類から遺物注記にあたって同様とした。グリッドNoは設定せずに、各横穴の主軸に沿った杭を打設し座標をもたせた。その杭を基準として土層断面図・遺物出土状況図を通常通り平板等を使用して測量した。遺構平面・立面図については、横穴天井崩落の危険性が高いため前回調査時と同様に現地作業時間の短縮、効率的な図面を作成する観点から電子平板測量を測量会社へ委託実施した。なお、立地上、発掘作業が危険で測量機材の搬入の困難な横穴(ST-010・011・014)については略測図を作成するまでにとどめた。

発掘調査は、まず調査前写真を撮影後、横穴ごとに玄室と羨道部の中心を通る主軸を設定し、横穴内の堆積土の半分を除去し、堆積状況を記録した。遺物が出土した際には遺物出土状況写真・図面を作成した。遺物は遺構毎に0001から通し番号を付けた。遺構の性格上、玉類の微細な副葬品の出土が想定されたため、玄室覆土下層と羨道部で遺物が出土した横穴についてはその周辺の覆土についても、発掘現場にて2mm～5mmメッシュのフルイかけ作業を実施し、遺物の発見に努めた。横穴内覆土の除去が終了後は完掘写真を各方向から撮影し、電子平板測量作業へ移行する流れで横穴ごとに順次進めた。掘削した土砂は基本的に場外へ搬出する必要があったため、まずは足場上にブルーシートを敷きその部分へ数日間仮置きした。適宜、工事用のベルトコンベアを使用して調査地点から約20m下に停めた2tダンプトラックへ流



玉崎神社裏横穴群

第1図 周辺地形図 (S=1/5,000)

0 (1:5,000) 200m



第2図 迅速測図による周辺地形図 (S=1/20,000)

し込み、場外へ輸送搬出した。ベルトコンベアの稼働は安全管理上の問題もあり最小限とし、工事区内で平成23年度に調査済みの横穴玄室内にも一部土砂を埋めた。

これらの発掘作業期間は平成25年2月1日から平成25年3月22日までである。以下は、調査日誌に基づいた週毎の発掘調査経過の概要である。

2月1日 施設設置・補助員引越、基準点測量のための多角測量及び、調査前横穴状況写真撮影、調査地周辺の環境整備作業を行う。なお、町内の神社清掃が午前中に行われた。

2月4日～2月8日 足場が工事用のものであったため、発掘作業の安全を確保するための足場補強整備を週初めに行い、本格的な発掘調査は2月5日からで、ST-007・008・009の主軸を設定し、羨道部から掘り下げを開始した。2月6日は雨天のため現場作業は中止とした。2月8日には上記の3基に加え、足場の下に位置するST-011の開口部周辺の土の除去作業を行った。

2月12日～2月15日 引き続きST-007・008・009の羨道部の掘り下げを行い、ST-007は断面図写真撮影・実測、ST-009は断面図写真撮影まで進めた。ST-011は、開口部の土砂搬出後、羨道部と玄室の段差を検出、玄室内の覆土除去作業を行い、玄室覆土の断面図の略測図を作成した。高所に位置するST-010の調査ではまずローリングタワーの設置と横穴までの通路を人力で地山掘削により造成した後、玄室内の覆土を除去した。13・15日は雨天のため現場作業は休業し、図面・写真整理を行った。

2月18日～2月22日 ST-007は玄室の精査を終え、全体の写真撮影を行った。その後、電子平板による測量作業を21・22日に実施した。ST-008は羨道部の半截を終え、断面の写真撮影と実測作業、ST-009は断面実測作業後、羨道部の掘り下げを継続して実施した。ST-010は完掘し、写真撮影まで終了した。新たに横穴（後のST-012）と考えられる凹みを検出され、周辺の土砂除去作業を行った。18・19日は途中から雨天となり、現場作業を途中で中止した。

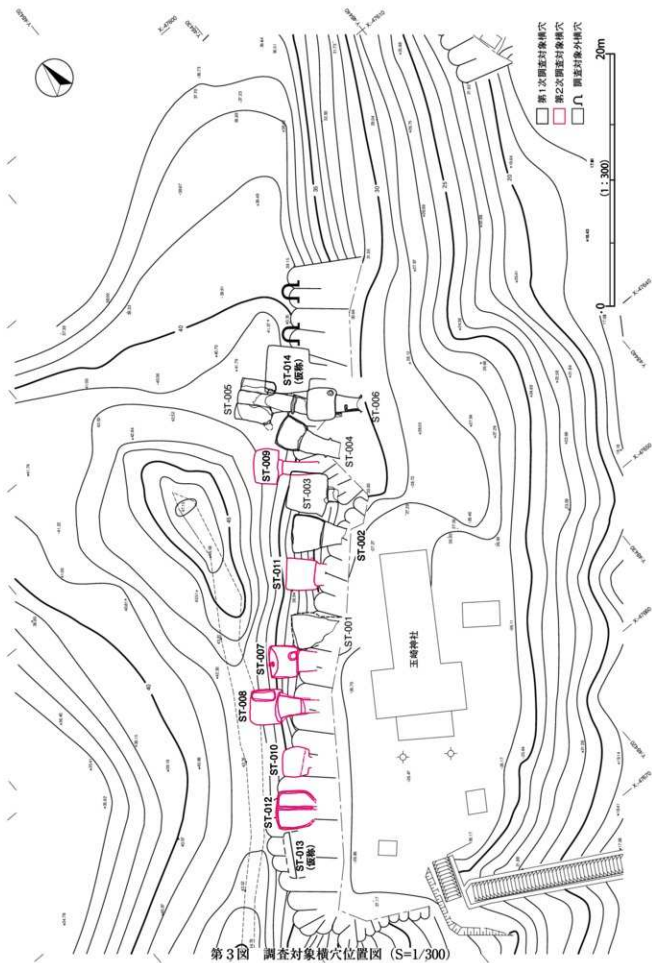
2月25日～3月1日 ST-008・009は引き続き羨道部の掘り下げ後、遺物の出土状況写真撮影と遺物取り上げを実施し、完掘した。ST-010・011については立地上、危険なため通常の実測作業ができなかったことから略測図を作成して終了した。ST-012は横穴であることが確定し、主軸にベルトを設定し、掘り下げを行った。また、この週から適宜、玄室下層堆積土を中心にフルイ掛け作業を開始した。2月28日、3月1日は雨天のため現場作業を中止とした。

3月4日～3月8日 掘削作業はST-012のみで、堆積土のフルイ掛けと並行して作業した。ST-012の断面図・写真撮影、遺物出土状況写真・図面の作成を行った。ST-012玄室床面からは大刀・鉄鎌・土器等が豊富に出土した。工事範囲外東側に位置する開口した横穴（ST-014<仮称>）を保存のため土嚢で塞ぐ作業をする前に、参考に現状写真・略測図の作成を行った。

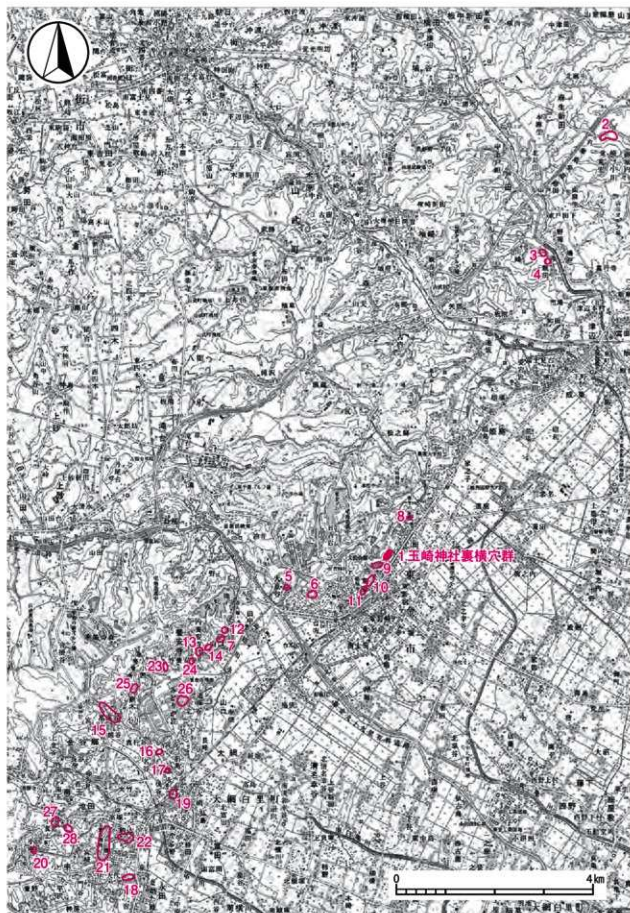
3月11日～3月15日 3月11日で発掘補助員作業は終了し、調査区全体の清掃後、全景写真撮影を実施した。テント等の施設類の撤収、搬出土砂の整地作業を行った。その後、電子平板測量の現地立ち会いと資料整理を並行して行った。14日に山武土木事務所事業担当者と掘削作業の現地終了確認を行った。

3月18日～3月22日 電子平板による測量成果物の校正作業及び写真等の資料整理を行った。

整理作業 発掘調査報告書作成にあたり、発掘調査において付けた遺構番号をそのまま使用したが、平成14年「千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書」では本横穴群について30基が確認され、それぞれに〇〇号横穴と遺構番号が付されているため、分布調査での遺構番号を< >内に表記し、対照できるようにした。整理作業は出土遺物の水洗・注記作業を行った後、遺物を遺構ごとに種別分類してから、



第3図 調査対象横穴位置図 (S=1/300)



第4図 周辺の横穴の分布

第1表 周辺の横穴一覧表

No.	遺跡名	よみ	所在地	基数	内 容	文献No.
1	玉崎神社裏横穴群	たまさきじんじゅうら	東金市田間	33	高壇式主体であるが、平成24年度の調査で無高壇の横穴が確認された。山武地域では最古段階から造営される横穴群。	本書-1・2
2	金尾横穴群	かなのう	山武市松尾町金尾	3	東・横横穴(東京人類学雑誌)のこたか。5基以上か、溝道部長い。	16
3	籠田北横穴群	おやだきた	山武市籠田	1	崩落等により内容不明。	
4	籠田東横穴群	おやだひがし	山武市籠田	1	崩落等により内容不明。	
5	朱塗の横穴	しゅぬりの	東金市大谷谷字村前	1	溝道部幅がやや狭く、両袖。支室天井ドーム形か。支室奥に石塔(五輪塔?)あり。	
6	谷横穴群	やつ	東金市東字谷	13	1～6号が残存、7～13号は宅地造成にて消滅。高壇式横穴の支室凹形含まれる。	2
7	千段穴横穴群	せんだんあな	東金市山口字川端	4	崩落等により内容不明。	
8	峠下横穴	みねした	東金市田間字峠下	1	高校の裏に所在するが、コンクリートで塞がれ、内容不明。	
9	上行寺裏横穴群	じょうぎょうじゅうら	東金市田間字新田	7	6・7号横穴調査。出土遺物なし。後世の改変あり。1号は高壇式横穴で支室凹形含まれる。	2・4
10	新宿横穴群	しんしゅく	東金市東金字新宿	19	五十瀬神社裏に所在。1～5号のみ確認できる。	2
11	岩崎横穴群	いわさき	東金市東金字岩崎	20	20基の位置関係のみアドバルーン測量。支室のみが残存。支室平面は方形。天井はドーム形か。7号横穴は高壇式の可能性有。	5
12	中谷横穴群	なかや	東金市山口字中谷	5	常安寺脇に所在。墓地に組み込まれる。一部再利用され、改変の可能性あり。	
13	正大横穴群	しょうだい	東金市山口字正大	10	海淵寺裏に所在。ほとんどが支室の一部のみ遺存。	
14	山口谷津横穴群	やまぐちやつ	東金市山口字谷津	10	現状でも再利用されており、横穴群には新しいものも含まれている可能性あり。	
15	掛水横穴群	もちのき	大網白里市金谷郷	26	20基調査。未調査6基を含めると5群構成。すべて高壇式。天井形態はドーム形12基、アーチ形4基、不明4基。全室平面はほとんどが隅丸横長方形。2基のみ凹形。棺座ありが12基。7世紀中葉から8世紀前半。湖西産須恵器多数出土。貝出土。	2・6
16	宮谷横穴群	みやざく	大網白里市大網字西宮谷	7	4基発掘調査。天井部の崩落の少ない高壇式横穴。横穴に伴う可能性のある墳丘状整形部が2ヶ所。支室平面は方形と凹形。天井形態はすべてドーム形。	2・7・8
17	北後谷横穴群	きたうしろやつ	大網白里市金谷郷字向谷	1	当初片袖形で棺台を欠くものから奥壁・左側壁を拡張、両袖形となりし字形棺台を有する。溝道奥から閉塞に使用した可能性のある石塊出土。貝出土。	9
18	永田横穴群	ながた	大網白里市永田	22	2号は支室床面全域を棺台として利用。3号は両壁沿いに棺台、樫を横した除階。天井部に明確な工具痕あり。2基とも遺物なし。	2・10
19	本宿横穴群	ほんしゅく	大網白里市大網	7	全て支室の一部のみ遺存。大網城の築城の一部削平。位置の確認調査のみ実施。支室天井形態は2号がドーム形。3号は家形。	11
20	小中横穴群	こなか	大網白里市小中	4	1号横穴は天井ドーム形。支室床面全域棺台利用か。支門は支室の軸より右にずれる。2～4号は支室の奥壁のみ遺存。溝が壁面に沿って床面に掘られる。	12
21	瑞穂横穴群	みずは	大網白里市みずは台	43	7群で構成される。高壇式横穴が63%で主体的。支室平面は方形。棺台は3つの字またはないのが主体。支室天井形態はアーチ・ドーム形。閉塞施設の自説あり。時期は7世紀前半～中頃か。	13
22	駒込横穴群	こまごめ	大網白里市駒込	7	瑞穂横穴群の北東に位置。支室の一部のみ遺存するものや崩落により不明のものも多い。	
23	小西横穴群	こにし	大網白里市小西	9	支室の一部のみ遺存するものが多い。	
24	養安寺横穴群	ようあんじ	大網白里市養安寺	2	支室の一部のみ遺存。	
25	風谷横穴群	かぜたに	大網白里市小西字風谷	2	支室の一部のみ遺存。	
26	道塚横穴群	みちづか	大網白里市大網字道塚		1・2号は支室奥壁のみ残存。3号は支室床面を棺台として利用。排水・区画溝あり。天井形態アーチ形。土器類・金環・玉類出土。7世紀初頃。4号は棺台造り出し、排水トンネル溝。天井形態ドーム形。ほかにヤグラ9基。古道。火葬墓。建物跡あり。	14
27	南谷横穴群	みなみやつ	千葉市緑区小食土町南谷	8	小食土横穴群の一部。乙弘横穴群の西に位置。溝道部は崩落。現在再利用され遺存意。	2・15・16
28	乙弘込横穴群	おっほらいこみ	千葉市緑区小食土町乙弘込	4	小食土横穴群の一部。南谷横穴の東に位置。南に開口。3基が高壇式横穴。№1横穴は軸は弱く、やや新しい時期のものか。	2・15・16

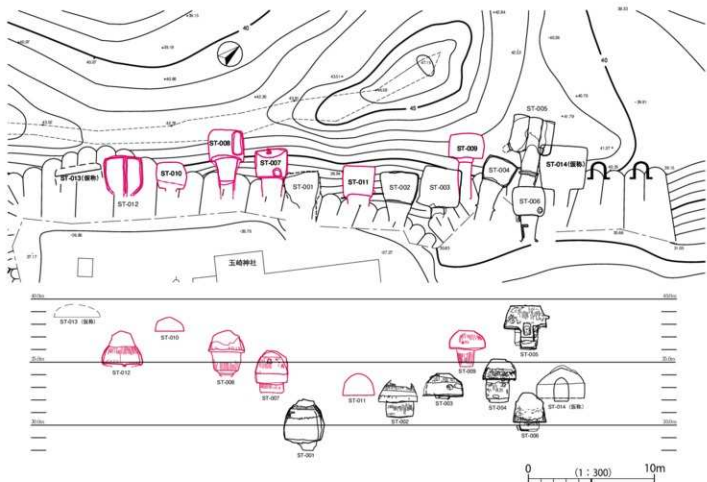
接合作業等を実施した。実測・拓本作業後の挿図・写真図版作成から編集作業は、前回の整理作業と同様に電子平板による測量成果やデジタルカメラによる記録写真の成果を活用するため、フルデジタル編集で印刷データまでの作成を行った。

第2節 遺跡の位置と周辺横穴（第1～4図、第1表）

玉崎神社裏横穴群は東金市の油井台先端、真亀川により細かく開析された九十九里平野に面する田間支台に位置する。ふもとの現集落が立地する平坦部が標高約10m、横穴群が展開する丘陵状台地頂部は標高約47mである。横穴は丘陵状台地の南東側斜面部（標高29m～39m）に横並びに造営される。調査前の現況は台中腹にある玉崎神社の裏山にあたる山林であった。神社を作る際に台中腹の平場を広げるため台地斜面部をほぼ垂直に切り出したため、その部分に所在した横穴の羨道・前底部が失われている。千葉県横穴は平成12～13年度にかけて実施した詳細分布調査によって811遺跡、4,557基礎確認された。特に、本横穴の所在する東上総地域は横穴群が濃密に分布する。第4図の東金・大網地域の横穴群のほとんどは九十九里平野を見下ろす台地・丘陵斜面部に分布するが、山武市金尾横穴群（2）、親田北・東横穴群（3・4）は若干内陸に入り込んだ台地斜面部に立地する。この地域の横穴形態は支室を羨道部より高く造り出す高壇式横穴で、支室天井はドーム・アーチ形が多く、羨道部が細長い特徴がある。これまでに（財）山武郡市文化財センターや（財）千葉県文化財センター等が実施した調査成果が蓄積されており、それぞれの横穴群の内容については一覧表¹⁾にまとめた。なお、周辺横穴群及び、本横穴群第1次調査分を含めた分析は第3章の総括において詳述する。

注)主に2003「千葉県所在洞穴遺跡・横穴群詳細分布調査報告書」千葉県教育委員会を参考に周辺横穴分布図を作成した。その分布調査で作成した「調査カード」も併せて参照した。一覧表の文献Noは下記文献と対応する。

1. 2013「東金市玉崎神社裏横穴群－田間急傾斜地土砂災害防止事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－」
(公財)千葉県教育振興財団
2. 1983「古墳文化基礎資料 日本横穴地名表」吉川弘文館
3. 1899 大野延太郎「上総國横穴調査」『東京人類学会雑誌』第15巻 第165号
4. 1983「千葉県東金市 上行寺裏横穴 第6・7号横穴発掘調査報告書」山武考古学研究所
5. 1989「千葉県東金市 岩崎横穴群」(財)山武郡南部地区文化財センター
6. 1999「県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書2－大網白里町餅木横穴群－」(財)千葉県文化財センター
7. 1926「史蹟名勝天然記念物調査」第二輯 千葉県
8. 2002「大網白里町宮谷横穴群－地方特定道路整備埋蔵文化財調査報告書－」(財)千葉県文化財センター
9. 1987「千葉県山武郡大網白里町 北後谷横穴」(財)千葉県文化財センター
10. 1992「財団法人山武郡南部地区文化財センター年報No.7－平成2年度－」(財)山武郡市文化財センター
11. 1989「本宿横穴群確認調査報告書－大網城跡測量調査報告書－」(財)山武郡南部地区文化財センター
12. 1989「財団法人山武郡南部地区文化財センター年報No.4－昭和62年度－」(財)山武郡南部地区文化財センター
13. 1986「千葉県大網白里町 瑞穂横穴群」(財)山武郡南部地区文化財センター
14. 1995「道塚横穴・ヤグラ群」(財)山武郡市文化財センター
15. 1974「千葉市史」第1巻・1976「千葉市史」史料編1
16. 1979「千葉県文化財センター研究紀要」4 (財)千葉県文化財センター



第5図 調査区横穴の平面・立面分布

第2表 遺構一覧表

()は推定

遺構No.	種類	主軸	玄室 平面形状	玄室 断面形状	高壇の 有無	時期	備考
ST-007	横穴	N-50°-W	方形	アーチ	有	古墳時代終末期	玄室は後世変遷により遺存不良。 羨道部床面より須恵器出土。
ST-008	横穴	N-52°-W	方形	ドーム	有	古墳時代終末期	羨道部より鉄鏝多数、土師器出土。
ST-009	横穴	N-50°-W	横長方形	ドーム	有	古墳時代終末期	玄室～羨道部天井部の遺存が比較的良好。
ST-010	横穴	(N-48°-W)	(隅丸方形)	(アーチ)	(無)	古墳時代終末期	高位置にあり。 玄室の奥半分の遺存。
ST-011	横穴	(N-44°-W)	方形	アーチ	有	古墳時代終末期	足場下の崖面に位置し、羨道部掘り下げ不能。玄 室天井部の遺存良好。
ST-012	横穴	N-50°-W	いびつ隅丸方形	ドーム	無	古墳時代後期～ 終末期	玄室のみ遺存。排水溝あり。 鉄刀・鉄鏝等豊富に出土
ST-013(仮称)	横穴?	不明	不明	不明	不明	-	調査対象外。高位置にあり、玄室床面のみの遺存 か。
ST-014(仮称)	横穴	(N-45°-W)	方形	家	無	古墳時代後期?	工事範囲外。大型横穴。危険防止のため入口閉塞。 略測図を作成。

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構 (第5図、第2表)

発掘調査は急傾斜地崩落対策事業の切土削平工事によって影響を受ける横穴6基に対して実施した。平成23年度に調査を行った第1次調査(6基)とあわせ12基が対象となった。調査範囲は玉崎神社裏横穴群全体の中央部にあたる。第2次調査の横穴は標高35m前後に所在し、第1次調査対象横穴より、一段高いグループとなる。横位置では重複することなくほぼ一定の間隔を開けて造営されている。

ST-007 <分布地図19号横穴> (第6図、図版4~6)

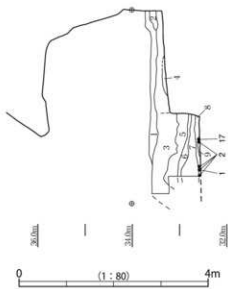
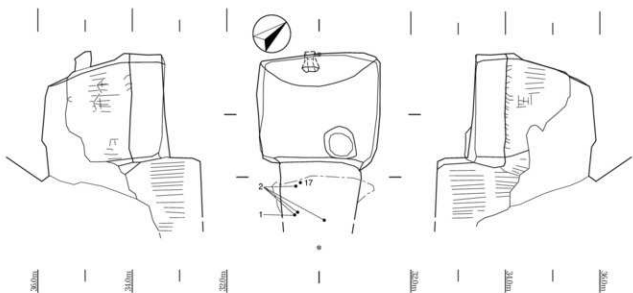
玉崎神社社殿の真横上位に位置する。ST-008とともに第1次調査時から開口しており所在が明らかであったが、直立した崖面の上位にあるため通常の調査が困難な横穴である。その後、工事用足場が高所に設計できることになり、それを利用することで安全面を確保しての発掘調査が可能になったため第2次調査での対象となった。第1次調査報告書では玄室に土砂が一部堆積した状況で工事立会した時の略測図を掲載したが、第2次発掘調査での今回の成果を最終的な報告とする。

土層堆積 玄室壁面の状況から二次的に玄室床面全体が約70cm掘り下げられていることが判明した。羨道部の第5~9層が古い時期での堆積層である。第5層上面は波打つが、この面と現玄室床面が露呈した状態が2次利用面と考えられる。その上に堆積する第1層~第4層は全体的にしまりは弱く、新しい時期に崩落した堆積層と捉えられ、第1層上部覆土からは錢貨が出土している。第4層中には白みのある砂状の物質が微量含まれ、骨粉の可能性もある。羨道部下層の第8層中から古墳時代の遺物が出土している。羨道部の入口は足場の下1m下に床面が位置し、崖面となっているため作業の安全を考え完全に掘りきることは断念した。

玄室 床面全体が下位に平らに掘りくぼめられ、その部分の側面はほぼ直立し、斜めの極めて荒い掘削に使用した工具の痕跡(以下、工具痕)が観察される。奥壁の中央部には倉状の掘り込み(縦32cm×横34cm×奥行34cm)があるが、こちらの工具痕も雑であり、近世以降に明かり取りとして追加されたものと考えられる。横穴築造当初の床面高さは壁面に短く細かい斜め方向の工具痕が見られる下端が相当すると考えられる。そのラインより上位は比較的壁面の遺存はよく、工具痕幅は9cm~11cmで、11cmのものが主体である。平面は方形で角は若干丸みがある。袖は存在するが、右袖部分は羨道との境が丸みを有し、不明瞭で、ほとんどなくなりかけている状態である。奥壁の稜線は明瞭で、面は玄室中央にやや傾き直線的に立ち上がる。側面は緩く内湾しながら立ち上がる。天井頂部は崩落しており、天井形態としては縦アーチ形と考えられる。玄室床面隔壁寄りには深さ約15cmの掘り込みがみられるが、不整形であり、人為的なものか判断しがたい。側壁面には「玉」「八」「キ」等、後世の落書きとみられるものが確認できる。

隔壁 玄室床面が後世に掘り下げられているため隔壁上部は失われているが、本来は推定で144cmの高さを有していたものと考えられる。工具痕は摩滅して不明瞭である。現状では下位に角度の変換点が見られるが、本来はほぼ直立していたものと考えられる。

羨道 羨道平面は奥(隔壁)側が広く、やや幅を狭めながら入口方向へ伸びる。全体的に幅広である。羨道部の天井部は崩落し遺存していない。床面はほぼ平らでしっかりとしており、入口方向へ向かってわ



ST-007

1. 灰白色土・砂層：しまり弱、粘土小ブロック少量。
2. 灰白色土層：粘土ブロック主体、硬質土層。
3. 灰白色土・砂層：しまり弱、天井崩落粘土・砂塊多量。
4. 暗褐色土・砂層：しまり弱、玄室床面直上土、白みあり（骨粉?）。
5. 灰褐色土・砂層：しまり有、粘土小ブロック・鉄分含。
6. 暗褐色土・砂層：しまり有、粘土小ブロック少量、炭化粒?鉄屑。
7. 灰褐色土・砂層：しまり強、粘土大ブロック含、鉄分且多。
8. 黒褐色土・砂層：しまり強、古墳時代の遺物包含層。
9. 灰白色砂層：しまり強、地山に近い。



第6図 ST-007

ずかに下がる。壁面の工具痕は9cm幅のものが主体である。なお、羨道の中途までの調査に留まったため、閉塞施設の有無は不明である。

前庭部 社殿築造時に平場を確保するため台地裾斜面部を削平した部分にあたり、現在では完全に失われており、形状は不明である。

遺物出土状況 玄室中央部の覆土上面に近い部分から寛永通寶が1点出土した。古墳時代の遺物は須恵器や鉄製刀子で羨道部最下層・床面直上から崩落土により押しつぶされた状況で出土した。

ST-008 <分布地図20号横穴> (第7図、図版7～9)

ST-007の左に隣接し、主軸もほぼ一致するが、羨道床面のレベルは約1.5m高い。調査当初から開口していた横穴であり、取扱い等の経緯についてはST-007と同様である。

土層堆積 羨道奥半分は玄室床面と同じレベルまで堆積した状態であった。玄室部では天井崩落の砂塊を除去するとしまりの弱い厚さ10cm弱の覆土のみの堆積が確認された。羨道床面直上の覆土は非常にしまりが強く、床面の判断が困難な部分もあった。第2～4層は天井崩落土・砂を主体とする層である。第5層には黒色(炭化)粒が含まれ、同層内でも玄室側ほど白みを帯びた色調であった。

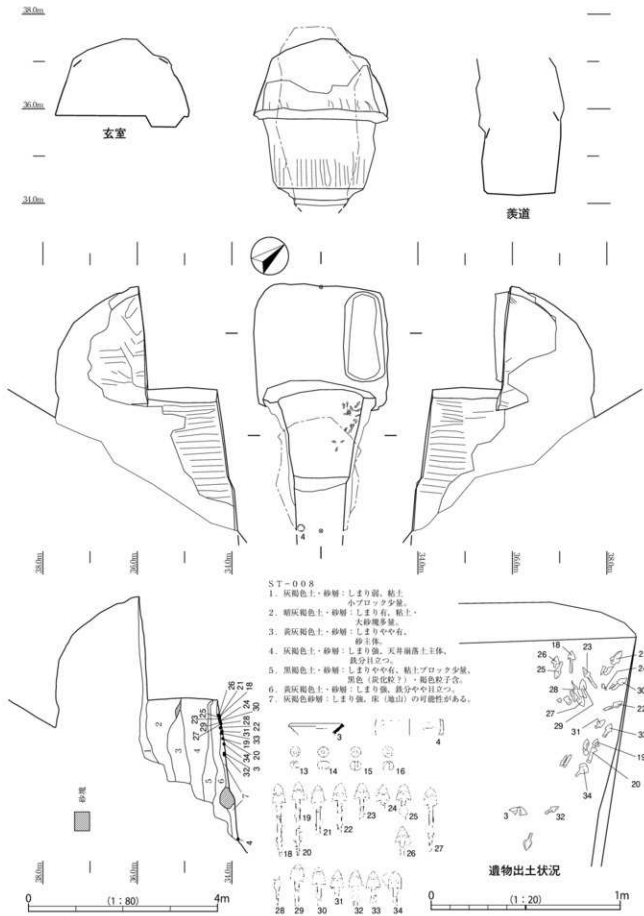
玄室 玄室平面形は隅が丸い、ほぼ正方形である。床面四隅から天井へ立ち上がる稜線は奥壁側の2辺が明瞭であった。奥壁面の立ち上がりは角度が比較的きつく、かすかに内湾しながら立ち上がる。側壁面は丸みがなくほぼ直線的に立ち上がる。天井部が大きく崩落しているため天井形態は断定できないが、天井部で全体が丸く収束するドーム形ないしは、やや可能性が低い横アーチ形が考えられる。屋根部の天井高が足りず家形の可能性はない。玄室床面に周溝等は存在しない。玄門周辺は床面がはっきりしないため所々掘りすぎてしまった部分がある。玄室床面右側には平面が隅丸長方形の棺座が掘り込まれている。深さは約24cmあり、しっかりとした掘り込みである。整形は雑である。棺座右脇のやや浮いた部分から鉄片が1点出土したのみで、副葬品にあたる遺物は出土しなかった。袖部は崩れているものの面を有する。玄室壁面の工具痕は明瞭ではなく、約10cmの幅のものが主体である。壁面下位ほど粗雑で荒い工具痕が確認できる。

隔壁 羨道床面から約155cmの高さである。上部30cmは地山層に根が入り、しまりが弱い状態であるが、下位の遺存が良好な部分では他の壁面と同様に工具痕が確認できる。

羨道 羨道平面は奥部が緩やかに撥状に開く形状である。床面は水平ではなく、他の横穴に比べ入口方向に向かって傾斜が著しい。入口寄りの床面には、不明瞭な段差が確認できる。段差より入口側にあたる左側壁には閉塞施設状の凹みがみられる。対面壁には存在しないため、根の入り込んだ後に、地滑り等でずれた可能性も考えられる。羨道側壁の工具痕の幅は9cm～14cmのものがあり、幅広の痕跡が主体であった。

前庭部 削平され確認できないが、羨道側壁が遺存している部分から入口側は地山面が一気に傾斜し下がるため、位置的にはこの部分から前庭部に相当する可能性がある。

遺物出土状況 羨道奥部の床面直上から鉄鏃が多く出土した。ほとんどが床面直上である。鏃身の向きは一定せず、副葬された原位置をとどめていないようである。また、羨道部入口付近からは土師器椀が口縁を上にしてほぼ床直で出土した。本横穴では羨道部にも遺物が出土したため玄室覆土に加えて、その周辺の覆土もフルイ掛け作業を実施した。その結果、玄室左側覆土中から白玉を4点回収することができた。



- ST-008
1. 灰褐色土・砂層：しまり強、粘土、小ブロック少量。
 2. 暗灰褐色土・砂層：しまり弱、粘土、大砂層多量。
 3. 黄灰褐色土・砂層：しまりやや弱、砂主体。
 4. 灰褐色土・砂層：しまり強、天井崩落土主体、炭分目立つ。
 5. 黒褐色土・砂層：しまりやや弱、粘土ブロック少量、黒色（炭化殻）・褐色粒子多。
 6. 黄灰褐色土・砂層：しまり強、炭分やや目立つ。
 7. 灰褐色砂層：しまり強、床（地山）の可能性ある。

第7図 ST-008

ST-009 <分布地図10号横穴> (第8図、図版10～12)

ST-003と004の間の高い位置で表土除去工事業により開口した横穴である。平成12・13年度の横穴詳細分布調査後、崩落により横穴入口が完全に塞がり、前回の調査段階では把握することはできなかった。第1次の報告書ではST-005が分布地図10号横穴にあたと捉えたが、今回の調査によってST-009が分布地図10号横穴、ST-005は分布地図9号横穴に相当することが判明したためここで訂正する。

土層堆積 羨道部は玄室床面とほぼ同じ高さまで土砂が堆積した状態であった。第5層～12層では羨道入口部から斜めに入り込んだ土砂の流れが確認できる。第6層と7層の間には鉄分が多く沈着する。第4・5層上面は平らであり、炭化物粒子が第5層中に含まれることから玄室との段差の少ないこの上面で、一時期横穴が利用されていた可能性がある。玄室内覆土は天井崩落の砂塊を除去するとしまりの弱い厚さ15cm程度が堆積していた。玄室平面中央部にはやや赤みがあり、被熱した痕跡の可能性があるが、状況からみて近現代の新しい時期のものと判断した。

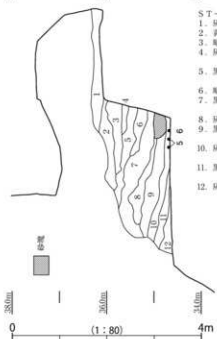
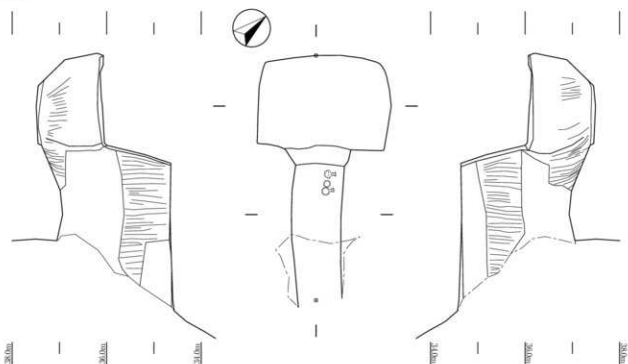
玄室 平面形は横長方形である。羨道部幅は玄室部幅に比べ狭く、しっかりとした袖部を有する。床面四隅から天井部へ立ち上がる稜線はほとんど確認できない。各側壁面はそれぞれ丸みをもって内傾しながら立ち上がる。特に上位では丸みを増す、典型的なドーム形天井である。天井中央部は崩落しているが、比較的遺存は良好である。工具痕は壁面が風化して不明瞭である。天井中央付近は黒いスス状のものが付着し、その周縁は赤みを帯びる。横穴築造時に施された赤彩の可能性がある。玄室から羨道部の天井部(前壁)は丸みを有し、工具痕も連続している。床面は根の影響で凸凹が著しい。周縁部が低くなり、溝状に見える部分もあるが、一定しないため攪乱と判断し、本来は平らであったと判断した。奥壁には後世のものと考えられる落書きがみられる。

隔壁 垂直ではなく、上位が玄室側にやや傾く。隔壁表面に当時の工具痕が確認できるため、横穴築造時から傾いた形状であったと考えられる。羨道床面から玄室床面までの高さは148cmである。

羨道 幅が一定して狭く長さのある、いわゆる長羨道である。天井部はほとんど崩落しているが、側壁面は比較的良好に遺存する。側壁面は、わずかに膨らみを持ちながら立ち上がる。壁面工具痕は幅8cm～9cmのものが主体である。床面は平らでしっかりとしており、玄室側はほぼ水平で入口側に向かい、わずかに低くなる。前庭部に近い部分まで遺存していると考えられるが、羨門部の閉塞施設等の痕跡は確認できなかった。

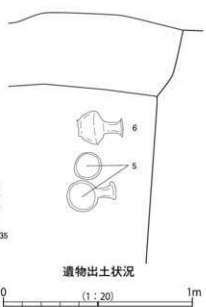
前庭部 羨道部入り口側から先は崖状となり遺存していない。本来の地山自体もそれほど緩やかな傾斜とは考えられないため、規模の大きい前庭部が存在した可能性は低い。

遺物出土状況 羨道部奥右側壁寄りから須恵器長頸壺・フラスコ瓶が並んで出土した。床面直上からの出土で、奥側が長頸壺、手前がフラスコ瓶であった。口縁を羨道部右側壁に向け倒れた状態で、フラスコ瓶は胴部が縦に二つに割れた状況であった。玄室から落ちたと考えるより羨道奥部に供えた状態から倒れたと解釈の方が自然である。玄室覆土のフルイ作業では鉄鏝破片のほか、近世のキセルも出土した。



ST-009

1. 灰褐色土・砂層：しまり強、白色粒子（骨粉？）微量。
2. 黄灰褐色土・砂層：しまり強、天井崩落小ブロック微量。
3. 暗灰褐色土・砂層：しまり強。
4. 灰褐色土・砂層：しまりやや有、進山ブロック含、やや白み帯びる。
5. 黒褐色土・砂層：しまり有、進山粘土小ブロック、炭化粒多量。
6. 暗褐色土・砂層：しまり有、炭分比較的多量。
7. 黒褐色土・砂層：しまりやや有、黒色粒子。
8. 灰白色粘土層：しまり、粘粒有、天井崩落土主体、白色粘土小ブロック多量。
9. 黒色土・砂層：しまり強、黒色・褐色粒子、粘土小ブロック多量。
10. 灰白色土・砂層：しまり強、天井崩落土主体、砂や層との間に炭分多量。
11. 黒褐色土・砂層：しまり強、黒色・褐色粒子、粘土小ブロック多量。
12. 灰白色土・砂層：しまり強、天井崩落土主体、黒色粒子微量。



遺物出土状況

第8図 ST-009

ST-010 <分布地図番号なし> (第9図、図版13)

今回の発掘調査対象横穴の中で最も高い位置にある横穴で、切土工事に伴って、新規に開口し存在が明らかになった横穴である。工事用足場にローリングタワーを組み、さらに崖面を階段状に掘削して玄室に到達し、覆土を取り除く調査を実施した。玄室のほぼ奥半分のみ遺存しており、作業スペースがほとんどないため、安全面を確保しての発掘調査は非常に困難であった。測量図面作成が不可能なため、土層断面図は省略し、遺構平面図・断面図は略測図で作成した。

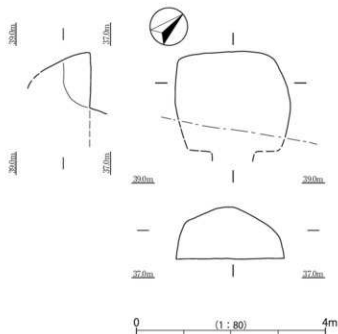
土層堆積 玄室内の土砂の堆積厚は約50cm程度であった。崖面の断面に玄室の床面ラインが確認出来たので、それを目安とした。玄室内に入って掘削するには作業スペースが狭く危険であったため、階段状に地山を削った部分からジョレンで掻き出すように覆土を掘り下げた。覆土は上層～中層までは天井(地山)ブロックが多く含まれる土、床面直上土は黒褐色土で、わずかに炭化物らしき黒色粒子が含まれる。

玄室 玄室平面形は右側壁が開き気味の不整形である。床面は平らではなく、細かい凸凹が多い。床面直上土がその凸凹に入り込み平らになっているが、横穴築造当時の貼床状構造なのか、後世に踏み固められたものかは判断がつかない。周溝は確認できなかった。奥壁コーナーから立ち上がる稜線は確認できた。奥壁面の立ち上がりは丸みを余り持たず直線的に立ち上がり、わずかに弧を描きながら天井部へ至る。側壁面もやや直立気味に立ち上がり上部で弧を描くため、天井形はドーム形であった可能性が高い。天井頂部や袖は遺存しないため形状は不明である。壁面の工具痕は遺存が悪い面もあるが、他の横穴で通常みられる細長く縦にのびる整形痕ではなく、細かく斜め方向に丁寧に整形している特徴がある。

隔壁・羨道 崖面となり確認できない。玄室床面と50cm以上の段差があったならば、遺存を確認できる部分があったが、その部分に床面は存在していないため、段差があったとしても50cm以内で、玄室形状・立地の類似性からST-012と同様に無高壇の可能性がある。

前庭部 崖面となり遺存せず、形状は不明である。

遺物出土状況 玄室の一部のみの調査のため、覆土掘削時には近現代の瓦片が2点出土したのみであった。床面に近い覆土(黒褐色土)についてフルイ作業を行ったが、明確に鉄製品と判断できる破片は出土しなかった。



第9図 ST-010

ST-011 <分布地図番号なし> (第10図、図版14・15)

本横穴は切土工事に伴い、工事用足場を設置した際に一部表土がすべり落ち、存在が確認された。横穴のほとんどが工事区内に設置された工事用足場の床面よりも下に位置することとなったため、かつ横穴入口直下は崖面になっているため通常の発掘調査は困難であった。調査前の写真撮影後、入口上部の土砂を取り除き、かろうじて人がひとり玄室に入るスペースを確保することができた。測量機材等の横穴内での使用が不可能であったため、玄室内の堆積覆土は取り除き、遺物の検出を行ったが、記録としては横穴内の写真撮影と略測図作成のみ実施した。

土層堆積 玄室部分は天井が良好に遺存し、8cm程度の覆土堆積だけであった。覆土はしまりのない黒褐色土と灰白色砂・粘土混じりで、炭化粒子が微量含まれる。近・現代と考えられる藁状のものが覆土の上ののった状態で確認できた。玄室中央部が覆土を含めてやや黒ずんでみえる。玄室平面形を検出後、それ以上羨道部側に掘り進めると、崖が崩落する危険性が高いと判断したため、隔壁の存在が確認できる程度までで掘削を終了させた。

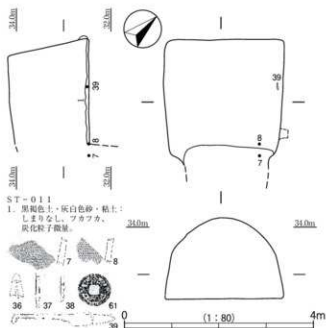
玄室 平面はやや奥壁側が広い方形である。各辺は直線的で、コーナーは丸みをもつ。奥壁側コーナーから立ち上がる稜線は明瞭であるが、玄門部の袖は角が弱く、不明瞭になっている。奥壁面は内側にわずかに傾いて直線的に立ち上がる。両側壁面は下位がやや直線的、上位の丸みが強くなり天井部へ至る。いわゆる縦アーチ形の天井形といえるが、側壁面に角度変換がかすかにあることを注視すると家形の名残とみることも可能ではある。床面はあまり安定して平らに検出することはできず、やや凹凸がある。周溝は確認できなかった。右側壁下部に小さな掘り込みが穿たれる。玄室下位壁面は細砂層に位置し、とろけた状態になっており、この小穴の工具痕ははっきりせず、横穴築造時に造られたものかは判断できない。

隔壁 完掘できていないが、玄室側に若干入り込む形状である。玄室との段差ははっきりしないが、50cm以上である。

羨道 玄室床面から20cm程度までの掘り下げが限界だったため詳細は不明で、幅は玄室よりはやや細い。

前庭部 崖面のため存在しない。

遺物出土状況 羨道奥から玄室にかけて遺物が出土した。出土レベルは、いずれも玄室床面から5cm前後浮いた範囲に集中している。平面的に羨道部にあたる部分からも同じ高さで出土したため、羨道部に土が玄室床面と同じ高さまで埋まった後に持ち込まれた遺物であろう。玄室右側壁そばから出土した鉄製刀子は重量感もあり、新しい時期のものと考えられる。玄室内覆土のフルイかけを行った結果、玄室左側から複数の鉄鏃破片、右側から炭化物破片が出土した。



第10図 ST-011

ST-012 <分布地図番号なし> (第11図、図版16・17)

切土工事範囲の南西端に位置する。当初確認されていなかった横穴である。発掘調査中の何日かに及ぶ雨により台地斜面の色に差異がみられる部分があり、改めて実施した台地斜面部へのボーリング調査により存在が明らかになった新発見の横穴である。

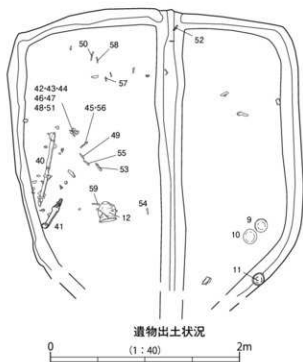
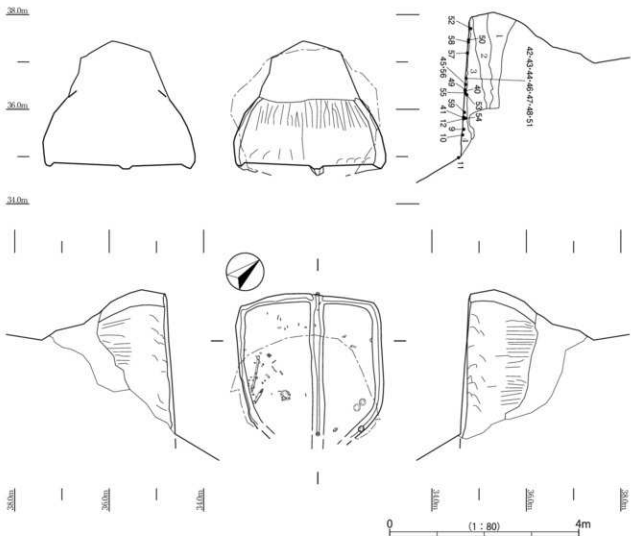
土層堆積 玄室天井部まで崩落土によってほとんど埋まった状態で、横穴である確証もなかったため、まずは上部に堆積していた土砂を上から全体的に掘り下げた。奥壁の形状が判明し、銭貨が出土し始めた段階で、主軸を設定し、堆積状況を観察しながら掘り進めた。銭貨は第1層中からの出土である。覆土は全体的にしまりが強い。第2層は玄室天井部が崩落したものが主体である。古墳時代の遺物が第4層の黒灰褐色砂層中に含まれていた。

玄室 床面の奥壁側はほぼ直角で、玄門部側は緩やかな角を持ち、推定形ではあるが、一見ホームベース状である。奥壁コーナーからの立ち上がり稜線は明瞭であるが、角の弱い前壁側の立ち上がりは不明瞭である。奥壁面は若干奥に膨らみながら内湾して立ち上がる。上位にかすかな角度変換点が確認できるが、側壁面では確認できず意図的かどうかは判断しがたい。天井の遺存は悪く、頂部の形状が不明だが、ドーム形天井と考えられる。壁面は縦位の幅9cmの工具痕が主体的であるが、床面から25cm～30cm程度の高さでは斜め方向の工具痕が認められる。床面は根の影響がほとんどなく硬質で平坦である。床面には外周と中央を走る排水溝がしっかりと掘り込まれている。外周は黒色土で埋まり、床面高さで明瞭に確認できた。中央部の排水溝は設定した断面図用ベルト下から検出したため確認時期が遅れた。中央部排水溝覆土の色調は非常にしまりのある灰褐色土で、鉄分が多量に含まれていた。排水溝幅は15cm～20cm、深さは8cm～10cmである。断面形は底面の平らな逆台形からV字形があり一定していない。玄室奥壁側は高く、玄門部側は低く造られており、排水用として構築されたもので間違いないと考えられるが、調査期間内で降った雨量では壁等から水がしみ出すことがなかったため、排水が機能している状況は実際には確認できなかった。

隔壁・羨道 横穴の遺存が玄室だけであるが、その手前の崖面傾斜部に羨道床面は掘り込まれていないことは確実であるため、段差のある高壇式横穴ではなく隔壁は存在しないと考えられる。玄室前壁側の床面形状からみて、羨道は玄室に比べかなり幅が狭いと考えられる。玄室の排水溝は羨道部でひとつに合流し、羨道中央部を貫いて前庭部へ至ると推定できる。

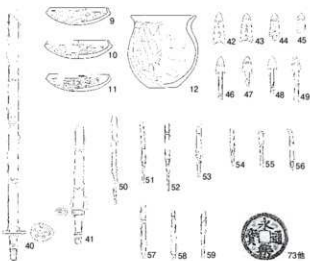
前庭部 崖面部にあたり遺存していないため不明である。

遺物出土状況 玄室床面直上から金属製品・土器器が豊富に出土した。出土レベルや土器のつぶれた状態での出土状況からみて、最終埋葬段階から期間を余り置かず、天井が大きく崩れたものと考えられる。出土位置は左側壁寄り・奥壁寄り・右側壁寄りの大きく3か所に分かれる。左側壁寄りの遺物群はまとまっており、土師器小型甕・大小の大刀・鉄鎌で構成される。小型甕は口縁を羨道部側に向け、倒れた状態で出土した。大刀はどちらも左側壁に刃を向けるが、切先は大が奥壁、小は前壁側に向ける。奥壁寄りでは鉄鎌がまばらに出土している。右側壁寄りでは土師器環が3点出土した。逆位が2点、正位がやや離れて1点排水溝に入った状態であった。なお、玄室覆土のフルイ作業では鉄製品の破片等は回収されなかった。



ST-012

1. 灰褐色土・砂層：しまりやや有、黑色・褐色粒子含、粘土大ブロック多量。
2. 暗褐色土・砂層：しまりやや有、天井崩落土主体、黑色粒子含。
3. 灰褐色土・砂層：しまりやや有、砂多量、鉄分目立ち。
4. 黒灰褐色砂層（部分的に灰色）：しまり強、床面直上土、黑色粒子含。



第11図 ST-012

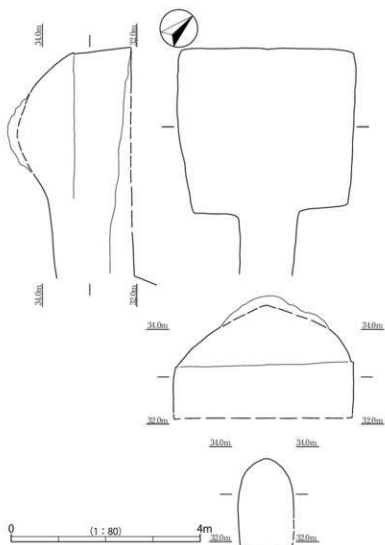
その他 (第12図、図版18・19)

ここでは発掘調査対象外ではあるが、関連横穴について発掘調査期間中に観察できた所見について概要を記す。なお、遺構番号については仮称のままとする。

ST-013 (仮称) <分布地図番号なし> 工事範囲内の左端(西)上位に位置し、工事による表土除去作業後に確認された。直線的な凹みがみられ、その部分が玄室床面を示す可能性が高い。崖面の高い位置にあるため、横穴であるかの検証はできなかったが、下部からの目視によると玄室自体は奥壁に近い部分のみの遺存で、玄室形状はST-012に近似し、直立気味に立ち上がる。しかし、床面と捉えたラインが幅3.8mと長いので横穴と断定するには躊躇される。個別に作成した図面はなく、玄室床面位置は電子平板により直接光波の反射による計測を行った。

ST-014 (仮称) <分布地図15号横穴か> 工事範囲外でST-006の北東に隣接する横穴である。第1章で前述したように地元の方から開口した横穴に子供たちが入り込まないように今回の急傾斜地対策工事に合わせ入口を塞いでほしいとの要望があり対応した。調査最終時に使用土壌を集めて入口を塞いだ状況は図版18の通りである。

玄室平面形は大型の方形で奥壁側の辺がやや大きい。玄室袖はしっかりと造られ、玄室前壁から羨道天井部にかけての整形も非常に丁寧である。羨道部幅は1.2mと非常に狭く、高さは186cmで、側面はほぼ直立し頂部が細く狭まる形状である。玄室壁面は各辺とも下位はほぼ直立に立ち上がり、床面から1.2mの高さで稜を段差になるよう強く造り出し、角度を変換させ天井頂部へ至る。典型的な家形天井で、壁面整形も非常に丁寧で、工具痕も明瞭に遺存する。天井頂部のみ崩落し、玄室から羨道部床面には覆土が最大40cm厚で堆積する。発掘調査していないため断定できないが、羨道部と玄室床面には段差は存在しない可能性が高いことから高壇式ではないと考えられる。今回の調査の中で、一番遺存状態の良い横穴である。



第12図 ST-014

第2節 遺物

遺物は横穴としては比較的多く出土した。須恵器や土師器の他に、鐵身形の遺存の良好な鉄鏃も多数出土し、各横穴の年代を推定する上で重要である。特に、ST-012からは完全に玄室が埋まっていたこともあり、大刀をはじめとする副葬品がまとまって出土した。玄室覆土を中心にフルイかけを行い、白玉や鉄鏃の破片を回収することができた。古墳時代遺物の他に、中・近世以降の銭貨や陶磁器破片等も出土した。

土 器 (第13図、第3表、図版21)

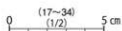
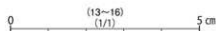
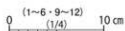
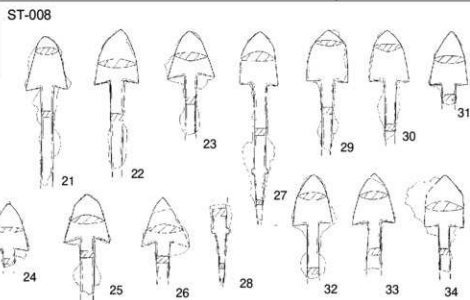
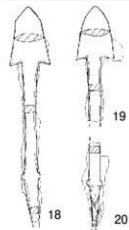
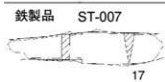
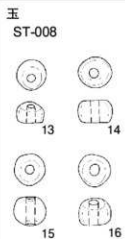
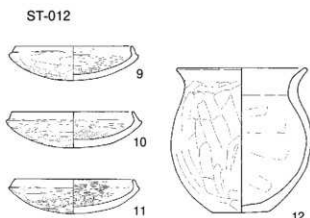
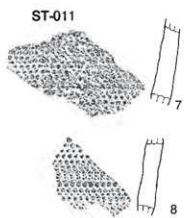
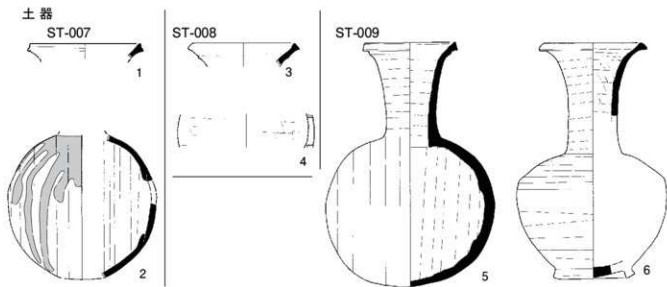
1・2はST-007出土の須恵器のフラスコ瓶である。同一個体の可能性が高い。胎土の色調は白みが強く、精緻であるが、黒色微粒子が微量含まれる。緑色系の自然軸が施される。口縁端部はややシャープさに欠ける。体部側面内部には蓋をするように閉塞した状況が確認できる。3・4はST-008出土で、3は須恵器の口縁部破片である。口縁端部はシャープな整形で、口縁直下には断面三角形の突帯状の線が巡る。外面に黒色の吹出しがみられる。4は土師器小型甕の胴部と考えられる。器壁は薄く、器面は外面の剥落が著しい。5・6はST-009出土の須恵器である。5はフラスコ瓶で、出土時にはほぼ半分が割れた状態であったが、完形に接合できた。割れた部分に小さな刺突痕がみられることから、人為的に割った可能性が高い。口縁部から体部上半に自然軸が付着する。口唇部分は非常にシャープである。器面には黒色の吹出しが目立つ。体部内面には部分的に小さな膨らみが複数確認できる。体部側面に蓋をして袋状に閉塞した様子も確認できる。6は完形の須恵器長頸壺である。体部上半に自然軸が付着する。体部上位に稜を有し、強く屈曲する形状である。頸部の立ち上がりは比較的長く、口縁端部は丁寧であるが、5に比べるとややシャープさに欠ける。底部と体部下位は回転ヘラケズリ調整である。頸部内面には絞り目がみられる。高台は付け高台である。胎土には白色微粒子がやや目立つ。7・8はST-011出土の火鉢破片である。器壁は厚く、器面は火を受け黒みを帯びる。外面には六角形の押型文が施される。径約13cm、体部は直立気味である。9～12はST-012出土の土師器である。9～11は同形状の口縁が短く内傾する坏である。体部は完形であるが、口縁に割れがみられ、意図的に欠いた可能性がある。器面はとろけているが、内外面ともに黒色処理されていた可能性が高い。内面はヘラミガキ、体部外面はヘラケズリ後ミガキ調整である。12は小型甕である。全体的な整形は丁寧で、頸部の屈曲が緩やかである。口縁部の欠けは古く、意図的に欠いた可能性がある。内外面とも、黒褐色物質が付着している。他に、近世以降でST-008の羨道部覆土中位から火鉢破片、ST-012の玄室覆土上層から染付破片が出土した。

玉 (第13図、第4表、図版21)

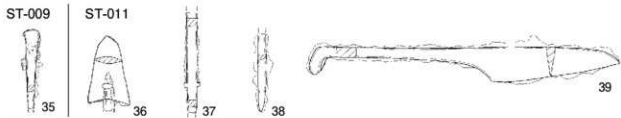
ST-008の玄室左側の覆土中から蛇紋岩製の白玉が4点(13～16)出土した。側面は丁寧に研磨されているが、13・16の上下面は水平でなく、いびつである。

鉄製品 (第13・14図、第5表、図版21-22)

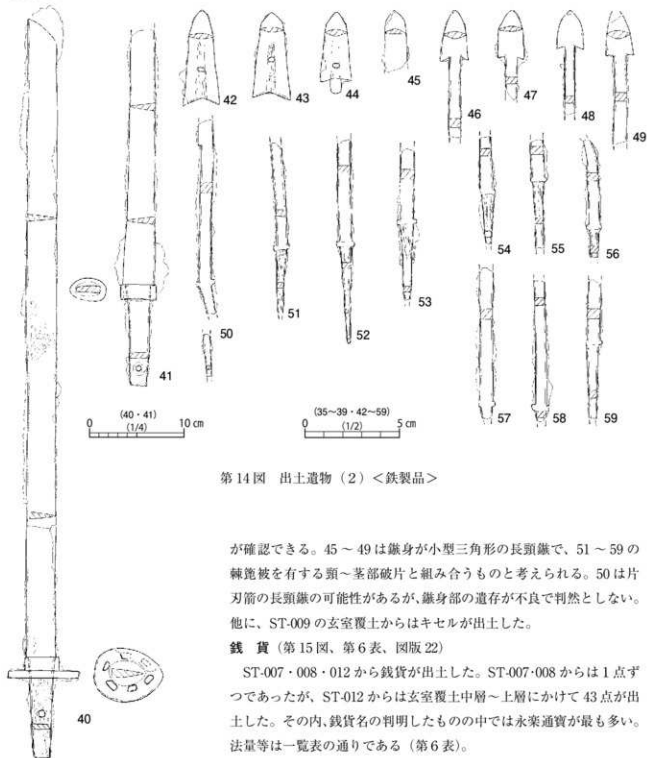
17はST-007から出土した刀子である。18～34はST-008出土の鉄鏃である。関の逆刺の浅い五角形の鐵身形の棘籠被長頸鏃である。関がほぼ直角のものが半数程度みられる(27～34)。35はST-009から出土した鉄釘で、木質が部分的に遺存している。36～39はST-011出土の鉄製品である。36の鉄鏃は、鐵身形が柳葉形の無茎鏃である。37は長頸鏃の頸部から基部の破片で、38は鉄釘の先端部と考えられる。39は銹の状態からみても他とは異なり、近代以降の可能性もある和鉄の半分である。40～59はST-012出土である。40・41の大刀はどちらも両関で、目釘穴が1か所である。切先部分は銹のため不明瞭である。40の鐔には台形の六窓の透かしがみられる。42～45は柳葉形の無茎鏃である。矢挟みの木質と楕円の孔



第13図 出土遺物(1) <土器・玉・鉄製品>



ST-012



第14図 出土遺物(2) <鉄製品>

が確認できる。45～49は鐵身が小型三角形の長頭鐵で、51～59の棘籠被を有する頭～基部破片と組み合うものと考えられる。50は片刃箭の長頭鐵の可能性はあるが、鐵身部の遺存が不良で判然としない。他に、ST-009の玄室覆土からはキセルが出土した。

錢貨(第15図、第6表、図版22)

ST-007・008・012から錢貨が出土した。ST-007・008からは1点ずつであったが、ST-012からは玄室覆土中層～上層にかけて43点が出土した。その内、錢貨名の判明したものの中では永樂通寶が最も多い。法量等は一覽表の通りである(第6表)。

錢貨

ST-007



60

ST-011



61

ST-012



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71



72



73



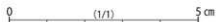
74



75



76



第15図 出土遺物(3) < 錢貨 >

第3表 土器観察表

() 測定 < > 現存長

No.	遺構No.	遺物No.	種類	器種	法量 (cm)	遺存定	胎土	色調・焼成	注	備考	
1	ST-007	0008	灰窓器	フラスコ瓶	口径 11.6	口縁破片	精製・黒色 粘土質	内面 5Y7/1 灰白	内面	ロタロナテ	自然釉。 2と同一體。
					底径 -			外面 5Y7/1 灰白	外面	ロタロナテ	
					器高 <1.6>			焼成 良好	底外面 -		
2	ST-007	0002 0000 0008 0005	灰窓器	フラスコ瓶	口径 -	胴部 65%	精製	内面 5Y7/1 灰白	内面	ロタロナテ	自然釉。 1と同一體。
					底径 丸底			外面 5Y7/1 灰白	外面	ロタロナテ・回転ヘラケズリ	
					器高 <15.3>			焼成 良好	底外面	ロタロナテ	
3	ST-008	0012	灰窓器	フラスコ瓶	口径 (10.8)	口縁破片	精製	内面 7.5Y 6/6-1	内面	ロタロナテ	
					底径 -			外面 7.5Y 6/6-1	外面	ロタロナテ	
					器高 <2.5>			焼成 良好	底外面 -		
4	ST-008	0006	土師器	甕?	口径 -	胴部の一部	白色霞粉砂	内面 2.5Y6/4 に近い黄	内面	ナテ	坯の可能性もある。
					底径 -			外面 2.5Y7/4 浅黄	外面	ケズリ・ナテ	
					器高 <3.5>			焼成 やや不貞	底外面		
5	ST-009	0002	灰窓器	フラスコ瓶	口径 9.5	完形	精製	内面 7.5Y 6/6-1	内面	ロタロナテ	自然釉。 2分測で出土。
					底径 丸底			外面 7.5Y 6/6-1	外面	ロタロナテ・回転ヘラケズリ	
					器高 25.8			焼成 良好	底外面	ロタロナテ	
6	ST-009	0003	灰窓器	長脚甕	口径 10.2	完形	霞粉砂	内面 7.5Y 6/5-1	内面	ロタロナテ	自然釉。
					底径 8.5			外面 7.5Y 6/5-1	外面	ロタロナテ・回転ヘラケズリ	
					器高 25.0			焼成 良好	底外面	ナテ	
7	ST-011	0003	土器	大鉢	口径 -	胴部破片	黒色霞粉砂・赤褐色スコリア	内面 7.5Y 6/4-1	内面	ロタロナテ	8と同一體。
					底径 -			外面 7.5Y 黒 2/1	外面	六角押型	
					器高 -			焼成 やや不貞	底外面	-	
8	ST-011	0003	土器	大鉢	口径 -	胴部破片	黒色霞粉砂・赤褐色スコリア	内面 7.5Y 6/4-1	内面	ロタロナテ	7と同一體。
					底径 -			外面 7.5Y 黒 2/1	外面	六角押型	
					器高 -			焼成 やや不貞	底外面	-	
9	ST-012	0006	土師器	罎	口径 12.2	85%	白色砂粒・赤褐色スコリア	内面 7.5YR4/1 黄灰	内面	ミガキ	内面に赤褐色物質付着。 口縁部一部欠。
					底径 丸底			外面 7.5YR7/4 に近い橙	外面	ナテ・ヘラケズリ後ミガキ	
					器高 3.7			焼成 やや不貞	底外面	ヘラケズリ後ミガキ	
10	ST-012	0007	土師器	罎	口径 12.8	90%	白色砂粒・赤褐色スコリア	内面 5YR5-2 黄褐	内面	ナテ・ミガキ	口縁部一部欠。
					底径 丸底			外面 5YR6/4 に近い橙	外面	ナテ・ケズリ後ミガキ	
					器高 3.9			焼成 やや不貞	底外面	ケズリ後ミガキ	
11	ST-012	0008	土師器	罎	口径 12.6	85%	雲母微粒子・赤褐色スコリア	内面 10YR6-2 灰黄褐	内面	ミガキ	口縁部一部欠。
					底径 丸底			外面 10YR7/3 に近い黄橙	外面	ナテ・ケズリ後ミガキ	
					器高 3.7			焼成 やや不貞	底外面	ケズリ後ミガキ	
12	ST-012	0007	土師器	甕	口径 13.6	95%	白色砂粒微塵	内面 5YR6/4 に近い橙	内面	ナテ	口縁部一部欠。
					底径 5.3			外面 5YR6/4 に近い橙	外面	ナテ・ミガキ・ケズリ	
					器高 15.3			焼成 良好	底外面	ケズリ後微塵	

第4表 玉計測表

No.	遺構No.	遺物No.	種類	石材	色調	口径 (mm)	直径 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)
1	ST-008	0031	白玉	蛇紋岩	N2/ 黒	2.5	7.5	5.2	0.53
2	ST-008	0031	白玉	蛇紋岩	2.5GY3/1 暗オリーブ灰	2.5	8.8	5.5	0.69
3	ST-008	0031	白玉	蛇紋岩	2.5GY4/1 暗オリーブ灰	2.1	8.0	7.2	0.74
4	ST-008	0031	白玉	蛇紋岩	N3/ 暗灰	3.0	8.0	7.0	0.72

第5表 鉄製品計測表

No	遺標No	遺物No	種 類	部 位 等	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)
17	ST-007	0006	刀子	切先・茎尻欠損	82.0	17.0	15.8
18	ST-008	0027	鉄鏃	茎尻欠損	114.0	21.0	12.6
19	ST-008	0016	鉄鏃	頸部～鏃身部	61.0	19.0	5.9
20	ST-008	0016	鉄鏃	茎部～頸部	44.0	8.5	3.0
21	ST-008	0029	鉄鏃	頸部～鏃身部	79.0	22.0	9.9
22	ST-008	0019	鉄鏃	頸部～鏃身部	74.0	23.5	10.2
23	ST-008	0028	鉄鏃	頸部～鏃身部	55.0	25.0	7.0
24	ST-008	0023	鉄鏃	頸部～鏃身部	34.0	20.0	3.4
25	ST-008	0026	鉄鏃	頸部～鏃身部	53.0	24.0	7.7
26	ST-008	0025	鉄鏃	頸部～鏃身部	37.0	25.0	5.1
27	ST-008	0021	鉄鏃	茎尻欠損	99.0	20.0	14.0
28	ST-008	0021	鉄鏃	茎部～頸部	42.0	9.5	3.1
29	ST-008	0022	鉄鏃	頸部～鏃身部	63.0	20.0	7.9
30	ST-008	0024	鉄鏃	頸部～鏃身部	58.0	20.5	6.9
31	ST-008	0018	鉄鏃	頸部～鏃身部	33.5	20.0	5.5
32	ST-008	0013	鉄鏃	頸部～鏃身部	55.0	21.0	7.1
33	ST-008	0017	鉄鏃	頸部～鏃身部	48.0	2.2	5.5
34	ST-008	0015	鉄鏃	頸部～鏃身部	51.0	20.0	9.6
35	ST-009	0005	鉄釘	下端欠損	41.0	9.0	2.7
36	ST-011	0006	鉄鏃	鏃身部	36.0	22.0	4.2
37	ST-011	0006	鉄鏃	茎部～頸部	53.0	9.0	4.6
38	ST-011	0006	鉄釘	上端欠損	41.0	5.0	2.4
39	ST-011	0004	鉄？	半分欠損	164.0	18.0	40.2
40	ST-012	0040	大刀	切先欠損、鈎あり	78.1	7.5	734.7
41	ST-012	0041	大刀	切先欠損	37.5	3.8	276.0
42	ST-012	0015	鉄鏃	鏃身部	50.0	1.9	4.5
43	ST-012	0015	鉄鏃	鏃身部	45.0	20.0	4.8
44	ST-012	0015	鉄鏃	鏃身部	37.0	16.5	3.6
45	ST-012	0014	鉄鏃	鏃身部	31.0	12.0	2.4
46	ST-012	0015	鉄鏃	頸部～鏃身部	67.0	14.5	6.0
47	ST-012	0015	鉄鏃	頸部～鏃身部	47.5	14.0	4.1
48	ST-012	0015	鉄鏃	頸部～鏃身部	53.0	14.0	4.7
49	ST-012	0013	鉄鏃	頸部～鏃身部	68.0	14.5	6.1
50	ST-012	0027	鉄鏃	鏃身先端・茎尻欠損	125.0	10.5	13.7
51	ST-012	0015	鉄鏃	茎部～頸部	90.0	8.0	5.3
52	ST-012	0030	鉄鏃	茎部～頸部	107.0	10.0	7.9
53	ST-012	0011	鉄鏃	茎部～頸部	80.0	10.0	6.9
54	ST-012	0006	鉄鏃	茎部～頸部	56.0	8.0	4.0
55	ST-012	0012	鉄鏃	茎部～頸部	57.5	9.0	3.9
56	ST-012	0014	鉄鏃	茎部～頸部	62.0	8.0	5.9
57	ST-012	0024	鉄鏃	茎部～頸部	79.0	9.0	8.7
58	ST-012	0026	鉄鏃	茎部～頸部	74.0	8.0	6.8
59	ST-012	0008	鉄鏃	茎部～頸部	73.0	9.0	6.0

第6表 錢貨計測表

№	遺構№	遺物№	銭貨名	初鑄年	計測値(単位:mm)					重量 (g)	備考
					縁外径	縁内径	郭外径	郭内径	縁厚		
60	ST-007	0001	寛永通寶	1636	25.2	20.8	9.0	7.1	1.1	3.0	新寛永
61	ST-011	0006	---寶	-	22.8	18.2	8.4	6.7	1.1	2.2	
62	ST-012	0002	治平元寶	1064	24.7	19.2	7.9	6.9	1.1	2.9	北宋
63	ST-012	0002	治平元寶	1064	23.7	19.9	7.3	5.7	1.5	2.9	北宋・兼書
64	ST-012	0002	元豊?通寶	1078	23.1	18.4	7.5	6.2	1.6	2.5	北宋
65	ST-012	0002	元豊?通寶	1078	23.0	17.8	8.0	6.5	0.9	2.0	北宋
66	ST-012	0002	紹聖元寶	1094	24.0	18.7	7.7	6.6	1.4	3.5	北宋
67	ST-012	0002	元符通寶	1098	25.1	19.8	6.9	6.1	1.3	3.4	北宋・兼書
68	ST-012	0002	聖宋元寶	1101	23.9	18.6	7.9	6.3	1.3	3.0	北宋
69	ST-012	0002	淳熙元寶	1174	24.8	19.5	7.7	6.2	1.3	2.9	南宋
70	ST-012	0002	洪武通寶	1368	23.0	19.0	6.8	5.9	1.5	3.0	明
71	ST-012	0002	洪武通寶	1368	23.8	17.9	7.0	5.5	1.3	3.4	明
72	ST-012	0002	永樂通寶	1408	25.0	20.6	7.0	5.8	1.5	3.9	明
73	ST-012	0002	永樂通寶	1408	25.2	20.8	7.3	5.4	1.5	3.2	明
74	ST-012	0002	永樂通寶	1408	24.9	21.1	6.8	5.8	1.4	3.8	明
75	ST-012	0002	永樂通寶	1408	25.9	21.2	6.9	5.6	1.5	4.1	明
76	ST-012	0002	-元通寶	-	23.6	19.7	7.9	6.4	1.3	2.7	開元通寶なら (南唐 960)

第3章 総括

玉崎神社裏横穴群は今回新たに発見された3基を加え、計33基の横穴から構成される。その内、平成23年度に発掘調査した6基と今回発掘調査・確認した8基を併せて14基の横穴の様相が明らかになった。ここでは、この14基の調査成果をいくつかの項目に分けて検討し、本横穴群の位置づけを行う¹⁾。

立地 (第16図) 東上総地域の横穴群は第1次調査報告書²⁾でも述べたように、分布から大きく3地区に分離できる。今回の玉崎神社裏横穴群を含む東金・大網白里地区(真亀川・南白亀川流域)と、その南に位置する茂原・長生地区(一宮川流域)、夷隅地区(夷隅川流域)である。横穴群と古墳群の分布をみると横穴群は明らかに一宮川流域を主体に展開し、高塚古墳群の分布が希薄な部分を補完しているような状況を示す。本横穴群は東上総地域の横穴分布域の北東端、九十九里平野に面する丘陵状台地の南東側斜面部に位置する。真亀川流域で東金市街地に面して分布する横穴群の立地は極めて似かよっており、関連性の強さがうかがえる。

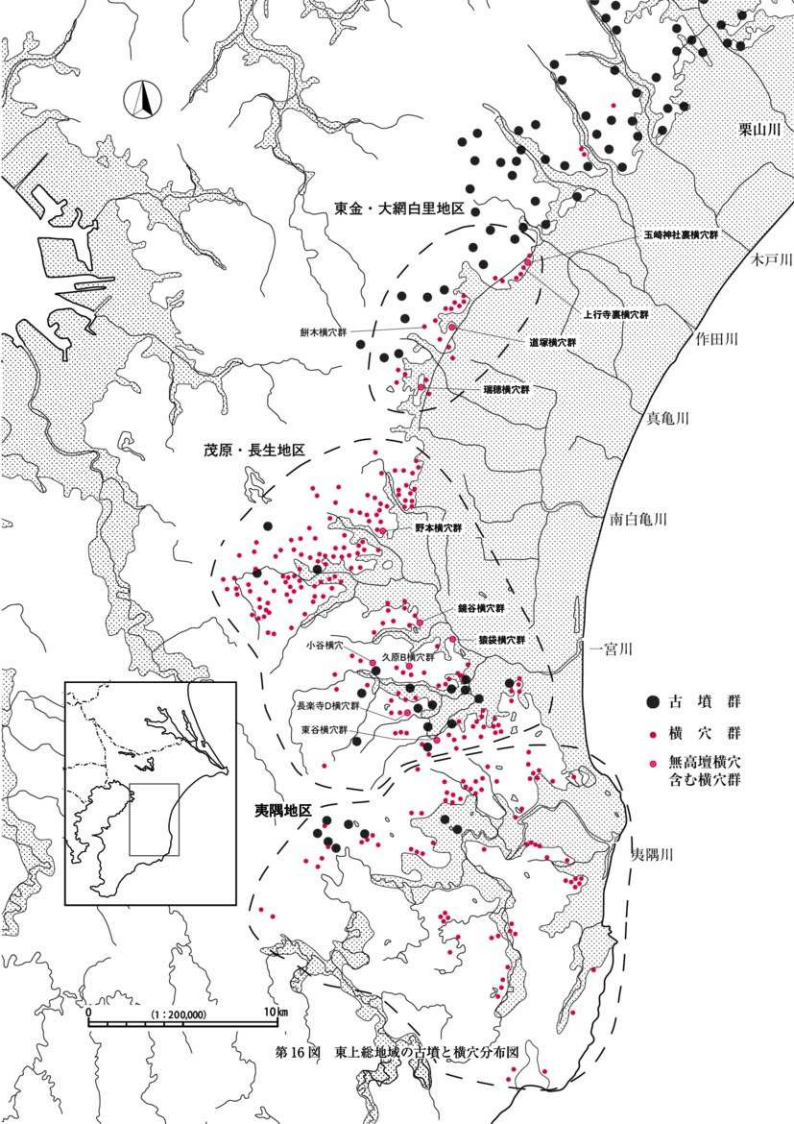
第1次・2次で調査・確認した14基(ST-001～014)はまとまって築造されており、北東側に連続して所在する横穴とともに1支群として捉えられる。南西側に横穴は確認できないためST-013が支群の南西端にあたると思われる。この支群の台地頂部についてはやせ尾根状で危険であるため、発掘調査は断念せざるを得なかったが、微細地形図(第3図)や現地での観察(図版20)では、他の尾根部分に比べ塚状に高くなっている。掘削工事による表土除去後に人為的な盛土がされていない事は確認できたが、位置的にみて周辺部の削り出しによる横穴に関連する塚の可能性がある。

玄室 (第17図) 調査した横穴玄室の平面形態は、方形を基本とする。玄室手前が細くなるST-012を除いて細分すると、横穴主軸に対して横長の長方形<ST-005・009>、角のはっきりした大型正方形<ST-003・014>、隅丸方形(台形)<ST-001・002・004・006・007・008・010・011>の3つに分類できる。天井の形態はドーム形が主体で、家形<ST-005・014>、縦アーチ形<ST-007・011>が含まれる。重要な点は全体的にはドーム状を呈する天井形態に家の壁部と屋根部との境を示す稜を有するもの<ST-002・003>が存在し、その稜線の明瞭差にばらつきがみられる点である。天井形がドーム形から家形へ変遷すると考えるより、家形からの退化・省略形がドーム形と捉える方が自然であろう。また、家形の横穴玄室の方が大型である点も特徴のひとつである。

羨道部 羨道天井部が良好に遺存する横穴はST-005・009・014と少ないため、明瞭ではないが側壁上位から丸みを持ちながら天井部を形成するものと考えられる。壁面の工具痕は玄室と基本的に同様である。羨道部側壁に閉塞施設に関連すると考えられる縦方向の溝が第1次調査のST-004～006の3基から検出されたが、第2次調査では羨道部の遺存が悪いためか検出できなかった。高壇式横穴の特徴として長羨道があげられるが、本横穴群の羨道部もその傾向にあるといえる。羨道部の奥が撥状に開きながら玄室につながるものと、幅が非常に狭く、広がらない直線的なものの2種類がある。

前庭部 今回の調査でも羨道部の手前部分から崩落している横穴が多く、前庭部構造についての情報はほとんど得られなかった。羨道入口部から先で床面が傾斜している横穴が確認できるため、前庭部床面は水平ではなかった可能性がある。

規模 (第7表、第17・18図) 調査した横穴は、玄室を高く造った高壇式と無高壇の横穴に大きく分



東金・大網白里地区

栗山川

木戸川

玉崎神社墓横穴群

上行寺墓横穴群

作田川

榎木横穴群

道塚横穴群

瑞穂横穴群

真亀川

茂原・長生地区

南白亀川

野本横穴群

鎌谷横穴群

一宮川

小谷横穴

久原B横穴群

猿袋横穴群

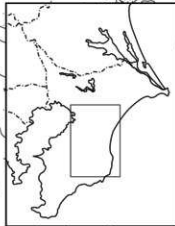
長楽寺D横穴群

東谷横穴群

- 古墳群
- 横穴群
- 無高墳横穴含む横穴群

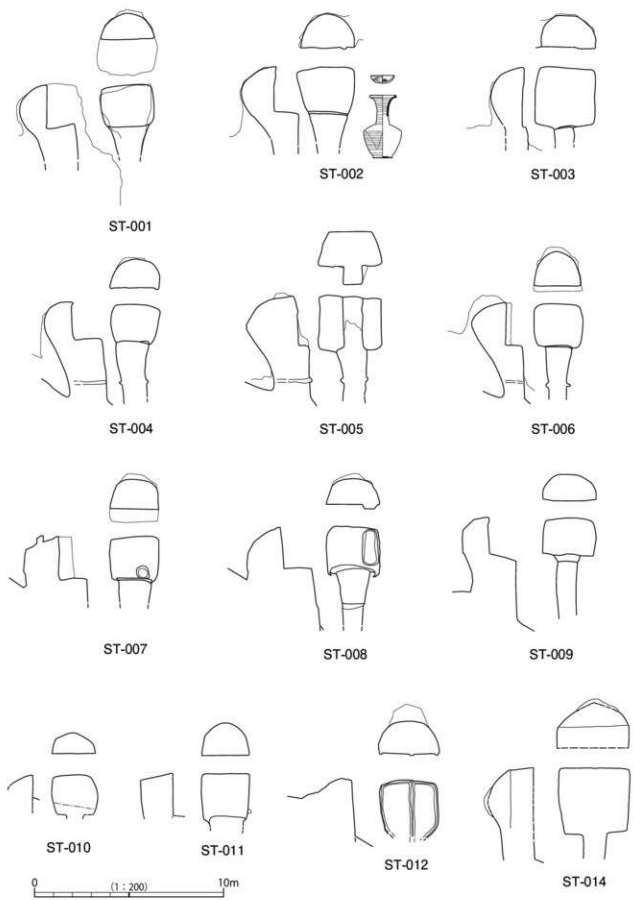
夷隅地区

夷隅川



0 (1:200,000) 10 km

第16図 東上総地域の古墳と横穴分布図

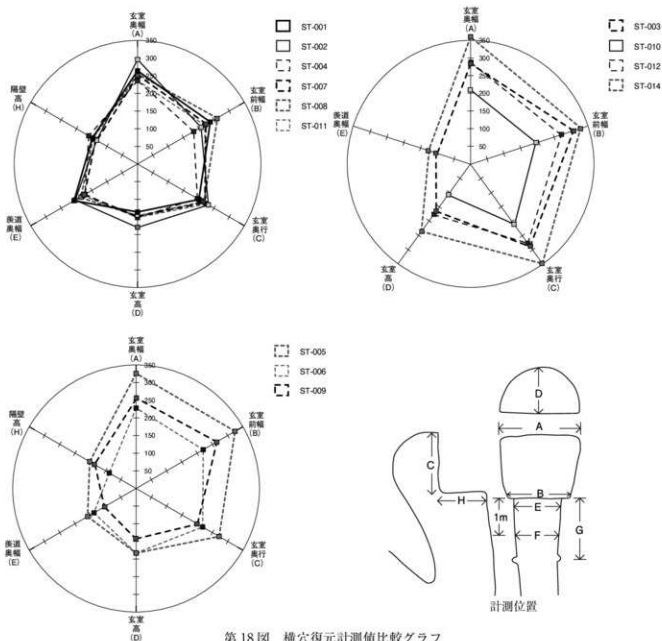


第 17 図 横穴復元平面・断面図

第7表 横穴復元計測表

(単位: cm)

遺構No	玄室 奥幅 (A)	玄室 前幅 (B)	玄室 奥行 (C)	玄室 高 (D)	羨道 奥幅 (E)	羨道 中幅 (F)	羨道 奥~閉塞長 (G)	隔壁 高 (H)
ST-001	264	238	201	136	208	136	-	148
ST-002	296	208	232	180	204	144	-	134
ST-003	284	308	288	166	104	96	-	24
ST-004	236	184	196	152	172	144	204	160
ST-005	326	324	272	183	159	130	152	152
ST-006	228	220	218	183	138	144	200	88
ST-007	250	225	216	162	175	157	-	149
ST-008	254	258	216	150	180	140	-	146
ST-009	252	261	200	140	104	106	-	142
(ST-010)	208	198	210	108	-	-	-	0
ST-011	247	219	223	151	178	-	-	-
ST-012	287	267	275	179	-	-	-	0
ST-014	366	325	349	238	128	112	-	0



第18図 横穴復元計測値比較グラフ

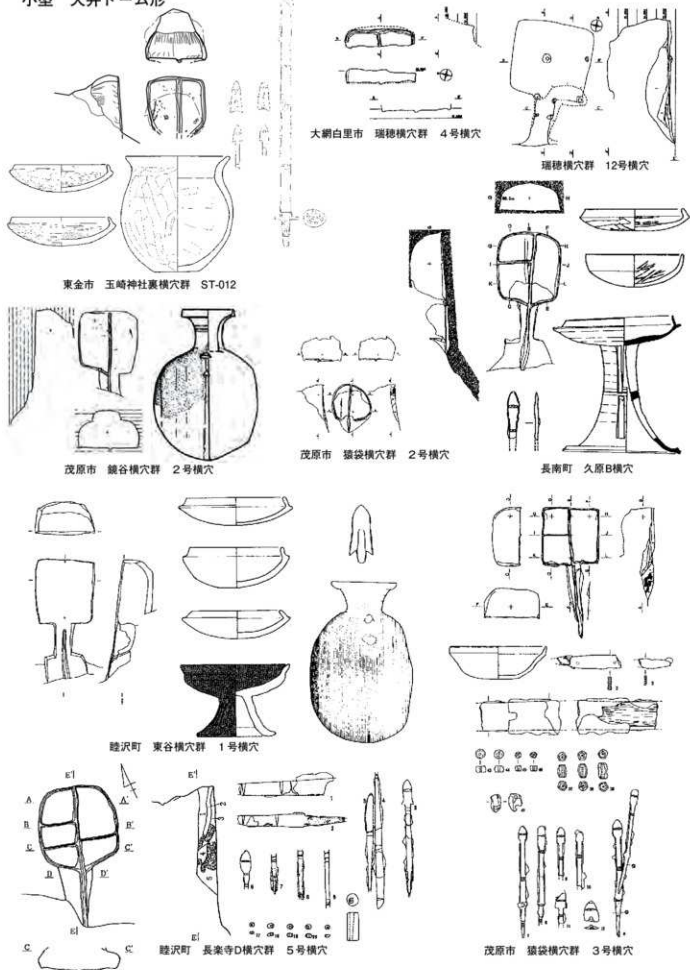
けられる。ST-003についてはわずかに玄室と羨道部に段差があるが、しっかりとした袖部構造・幅の狭い羨道からみて、高壇式横穴とは異なるものと考えられる。全般的に横穴の前底部から羨道部の一部にかけて削平や天井部の崩落が進み、遺存状況は不良であった。しかし、調査時の観察や細かい工具痕など遺存状況の記録によって築造時の横穴形状を類推できるものについては、積極的に平面・断面について復元図（第17図）を作成し、第7表の横穴規模の計測値はその復元図に基づいている。小型の高壇式横穴で玄室袖の不明瞭な横穴は、グラフでも明らかのように、玄室奥壁がやや開くST-002が外れる程度で、ほぼ同一の規格といえる。その中にST-007・011のアーチ形天井の横穴も含まれている。一方、玄室袖のしっかりした高壇式横穴（ST-005・006・009）は玄室平面形状・天井高・羨道幅で大きく相違するため、それぞれ別型式と考えられる。無高壇の横穴の比較では、羨道奥幅の数値が出揃わないが、ST-003の玄室平面形が正方形に近い点でややはずれるのみで、他の部分のグラフ形はほぼ相似形に近く、同一型式内の範疇で捉えられる。

出土遺物 古墳時代の遺物はST-010を除き、各横穴から出土した。ほとんどがほぼ床面直上からの出土であった。出土した須恵器については、いずれも胎土・色調・調整等から考えて東海産須恵器である可能性が非常に高い³⁾。

ST-007の羨道部出土の須恵器フラスコ瓶はつぶれた状態であった。頸部が遺存せず全体形状は不明である。口縁端部が大型化せず、体部はほぼ球形である特徴から、7世紀後半でもあまり新しくない時期が想定できる。ST-008からまとまって出土した鉄鍬は、三角形の鍬身で頸部がやや短化した特徴をもつ。鍬身先端部にわずかに角を有する個体も含まれるが、ほぼ同型式の鉄鍬と捉えられ、一括して副葬したものであろう。鍬身長が平均2.8cmで幅があり、7世紀前半の資料に類例が多い形態といえる。ST-009からは完形の須恵器長頸壺・フラスコ瓶が並んで出土した。フラスコ瓶は人為的に割られた痕跡があり、羨道奥に並べた後、打ち欠いたものと考えられる。長頸壺は肩部が弱く屈折する特徴から7世紀末葉から8世紀初頭の年代が考えられる。フラスコ瓶は体部がややつぶれた球形で口縁端部がシャープでしっかりと調整されており、7世紀末葉までの所産であろう。ST-011からは無茎柳葉式と棘籠被を有する長頸鍬破片が出土した。柳葉式の鍬身長はST-012出土鉄鍬より小ぶりなためやや新相と捉え、7世紀前半の年代を想定したい。無高壇の横穴であるST-012からはほぼ完形の土師器埴3点と小型甕、大刀2振、鉄鍬が多数床面直上から出土した。出土状況から最終埋葬時期からあまり間をおかず天井が崩落したため、当時の埋葬状態をよく残しているものと考えられる。遺物は大きく3か所にまとまっていることからその位置に遺骸も埋葬されていた可能性は高く、当時の副葬状況を復元するための貴重な資料といえる。無茎柳葉式の鉄鍬は、鍬身長5cmと大きい個体が含まれ、やや古相の6世紀後葉から7世紀初頭に多くみられる形状である。土師器埴は口縁が短く内傾し、器高が低く、内外面ともに黒色処理されている特徴から、6世紀後葉の年代が考えられる。土師器類は小型甕も含めていずれも口縁部の欠けがみられることから、意図的に打ち欠く行為が行われていた可能性がある。

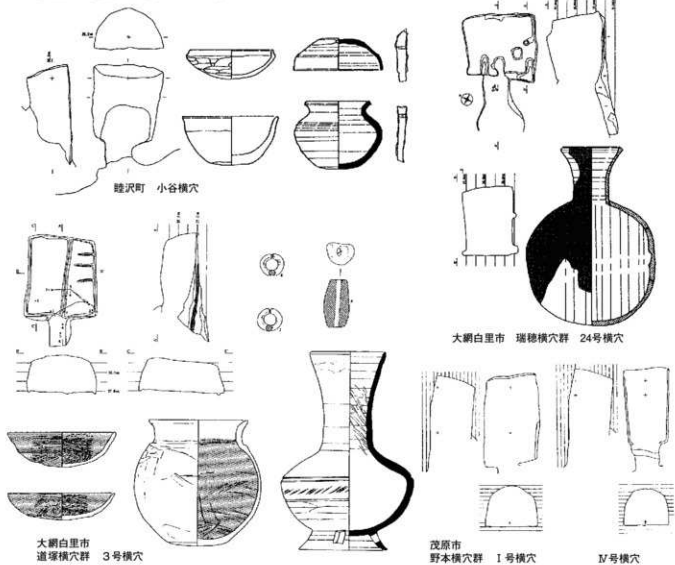
無高壇横穴（第16・19・20図） ST-012は玄室を高く造らない無高壇の横穴である。遺物が豊富に出土しており、土師器・鉄鍬の時期から造営期間は6世紀後葉、下っても7世紀初頭の範囲内に取まらうである。他時期の副葬品がみられないことから横穴の造営が短期間のうちに天井が崩落したと考えられ、横穴形態に年代の定点を与えられる重要な資料である。東上総地域において同様の形態の横穴を集成したものが第19・20図⁴⁾である。遺物が全体的に豊富に出土し、遺物は6世紀後半から7世紀初頭の時期の

小型 天井ドーム形

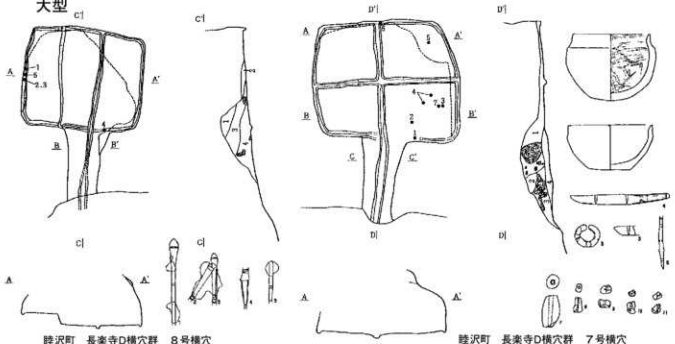


第19図 東上総地域の無高壇横穴(1)

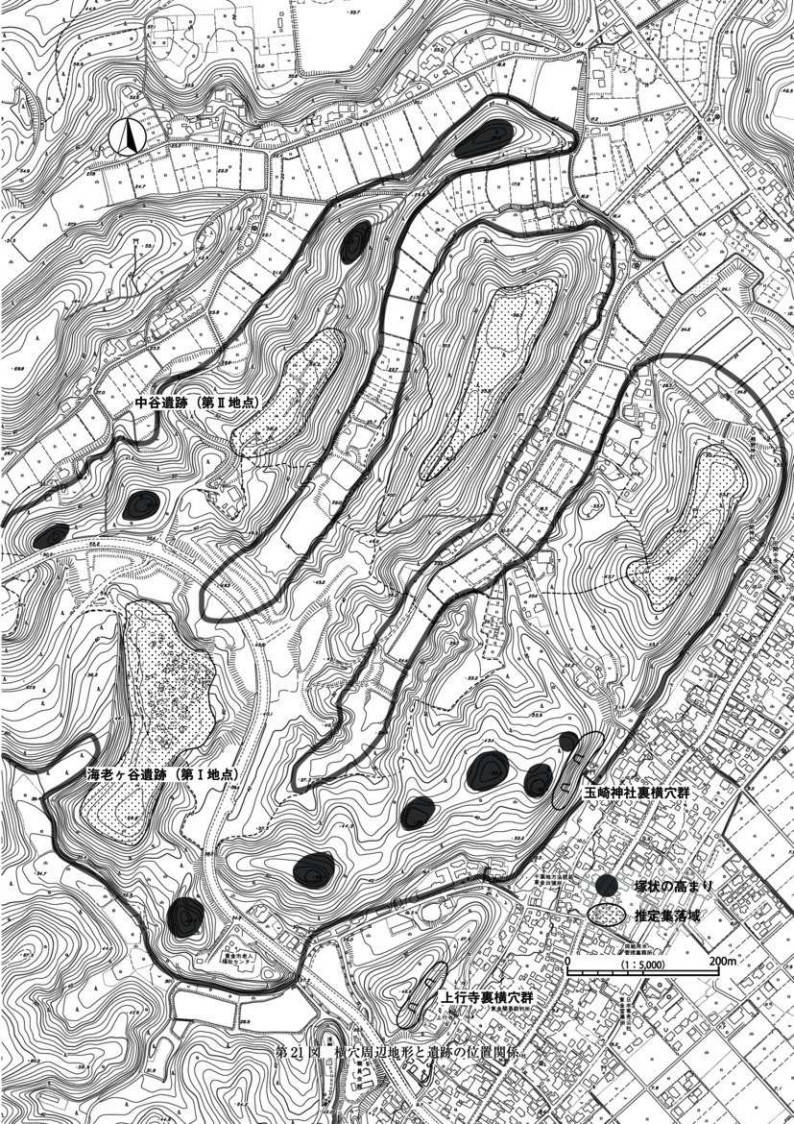
小型~中型 天井アーチ形



大型



第20図 東上総地域の無高壇横穴(2)



中谷遺跡 (第Ⅱ地点)

海老ヶ谷遺跡 (第Ⅰ地点)

五崎神社裏横穴群

塚状の高まり
推定集落域

上行寺裏横穴群

第21図 横穴周辺地形と遺跡の位置関係

ものが主体である。分布は第16図のとおりで局地的な偏りはなく、各地域にみられる。形態は玄室が小型方形でドーム形天井、小型縦長方形でアーチ形天井、1辺が5mを超える大型方形の3つに分類できる。全体の遺物相からみて時期差は大きくなく、排水溝が敷設されるなどの共通した特徴をもつ。

横穴の変遷 本横穴群は遺物の年代が示すように高壇式横穴の前段階である無高壇・両袖・細羨道のST-003・(010)・012・014が先行して築造されたと考えられる(第1期)。第2期として玄室の造りが丁寧な家形構造で、大型のST-005が築造されたと考えられる。玄室天井形態が家形からドーム形へ変化の中で、屋根部表現が形骸化しているST-002が第3期、規模の共通性が高いST-001・004・007・008・011が第4期と考えられる。ST-006・009は袖部がはっきりしているものの、小型で天井も低いドーム型で羨道部も非常に細いことから、玄室が大きく袖のしっかりした横穴とは時期が異なり、ST-009出土須恵器の年代からも一番新しい段階の横穴と捉えたい。想定される年代は第1期がST-012出土遺物の年代から6世紀後葉、第3期がST-002出土土師器から7世紀中葉、最終期がST-009出土須恵器から7世紀末葉以降である。

横穴周辺の様相(第21図)古墳時代に横穴の分布の多いこの周辺地域では、高塚古墳が少ないことが良く指摘されるが、古墳時代後期以前の集落遺跡についてもほとんど確認されていない。横穴は樹枝状に開析された丘陵状台地先端部の九十九里平野を望む南東斜面に分布するが、その台地の付け根にあたる台地平坦部では、ほぼ一様に古墳時代後期の6世紀後半以降から東金台遺跡群、油井古塚原遺跡群、小野山田遺跡群、大綱山田台遺跡群、久我台遺跡等の集落が形成されていく様相が発掘調査により明らかにされている。玉崎神社裏横穴群の所在する台地周辺について、地形図を元にして当時の集落域との位置関係を示したものが第21図である。周辺では東金台遺跡群⁵⁾中の海老ヶ谷遺跡、中谷遺跡が発掘調査が実施され、特に海老ヶ谷遺跡では6世紀後半から9世紀にかけての100軒を超える拠点的な集落跡が明らかにされている。周辺を概観すると細尾根上に塚状の高まりがみられ、その南東側斜面に横穴群、台地付け根や先端の台地平坦部に横穴被葬者たちが住んだ集落が位置するという景観を想定することができる。集落が前代から継続しない地域に突如発生し、長期的に発展していく状況は、横穴という新たな墓制がこの地域に採用される時期と基数の増加を併せて考えると、他の地域から政治的意図をもった集団の移動を示唆しているように思える。横穴の被葬者像を推定する上でも重要な事例の一つであるといえる。

注) 1. 東上総地域の横穴の変遷については主に下記文献を参考にした。

- 1991 上野恵司・松本昌久「千葉県内の横穴墓群」[茨城県考古学協会シンポジウム 関東横穴墓遺跡検討会資料]
- 1993 松本昌久「東上総における横穴墓について」[「多知波奈考古」創刊号 橘考古学会]
- 2008 西原崇浩「千葉県横穴墓の受容と展開」[「多知波奈の考古学 上野恵司先生追悼論集」]
2. 2013「東金市玉崎神社裏横穴群-土砂災害防止委託埋蔵文化財調査報告書(公財)千葉県教育振興財団
3. 須恵器については主に下記文献を参考にした。また、餅木横穴群出土の湖西産とされた須恵器について実見し、第1次調査分も含めた当横穴出土須恵器と比較・検討した結果、いずれも湖西産の可能性が高いと判断した。
1999「県道山田台大綱白里線埋蔵文化財調査報告書2-大綱白里町餅木横穴群-」(財)千葉県文化財センター
2000 鈴木敏則「古墳時代湖西産編年の再構築にむけて」[須恵器生産の出現から消滅] 東海土器研究会
2004 鈴木敏則「静岡県下の須恵器編年」[有玉古窯] 浜松市教育委員会
4. 第19・20図の横穴実測図は1/200、土器実測図は1/5、その他の遺物は任意の縮尺である。
5. 1980「東金台遺跡I」 東金台遺跡調査団

写 真 图 版



玉崎神社裏横穴群



調査区遠景（南東から）



野原以下から



樫穴から台地下



神社下から



調査前 (南から)



調査前 (東から)



足場下から



調査後 (南から)



調査前 (南東から)



調査後全景 (南東から)



玄室調査 (南東から)



玄室床面



玄室天井



玄室羨道部 断面



玄室 左奥



玄室 右奥



玄室 左壁



玄室 右壁



玄室 左袖



玄室 右袖



玄室 奥壁掘込



隔壁 (上から)



羨道部 (玄室から)



羨道部 遺物出土



羨道部 左壁



羨道部 右壁



羨道部 左壁 (正面)



羨道部 右壁 (正面)



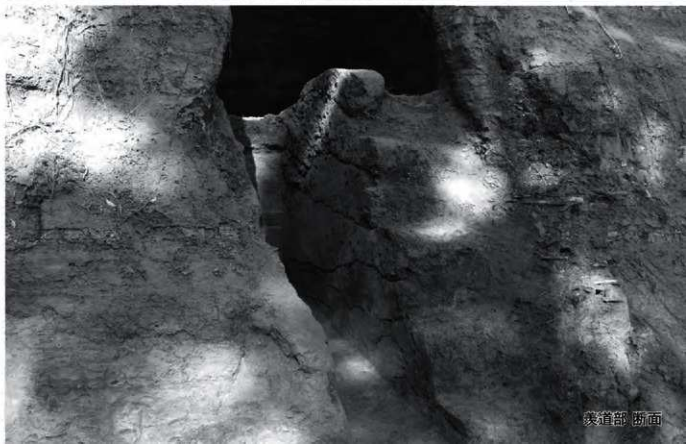
調査前 (南東から)



調査後全景 (南東から)



棺座 (羨道部から)



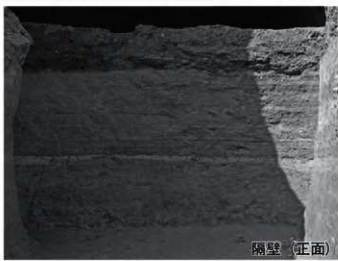
羨道部 断面



玄室天井 (手前が易)



玄室奥壁



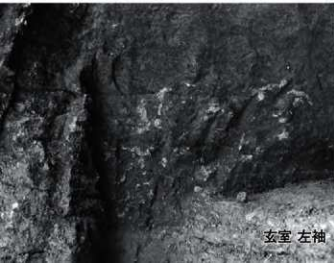
隔壁 (正面)



玄室左壁



玄室右壁



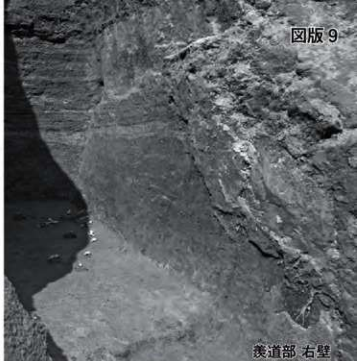
玄室左袖



玄室右袖



羨道部 左壁



羨道部 右壁



羨道部 遺物出土 (手前から)



羨道部手前 遺物出土



羨道部奥 遺物出土 (南西から)



調査前 (南東から)



女室 天井



調査後全景 (南東から)



羨道部 断面



玄室 奥壁



玄室 左壁



玄室 右壁



玄室 左袖



玄室 右袖



羨道部 天井



羨道部 左壁



羨道部 右壁



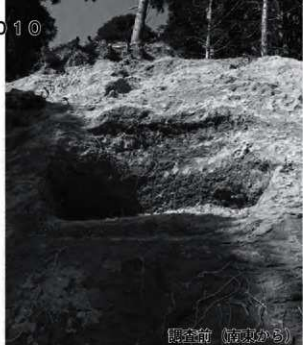
羨道部奥 遺物出土



羨道部奥 遺物出土 (南西から)



羨壁 (東面)



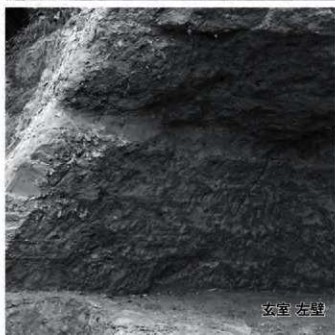
調査前 (南東から)



玄室 奥壁



調査後全景 (南東から)



玄室 左壁



玄室 右壁



玄室 上部 (下は足場床面)



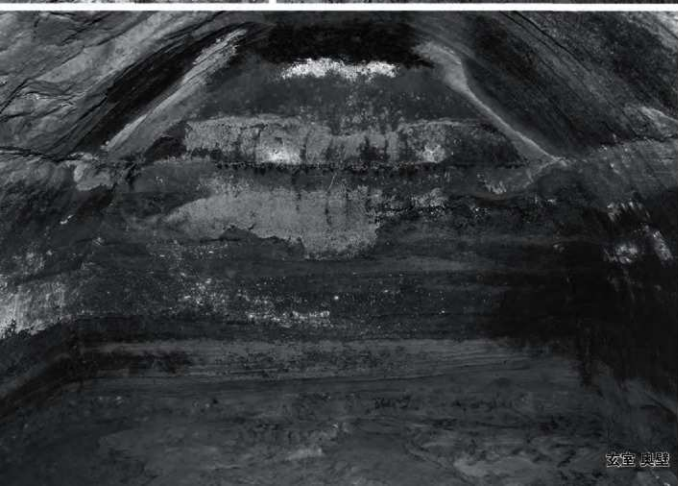
玄室 床面 (入口から)



玄室 調査 (南東から)



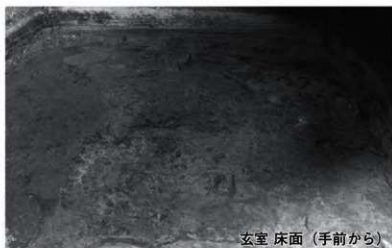
玄室 断面 (東から)



玄室 調査



玄室 前壁



玄室 床面 (手前から)



玄室右袖周辺 遺物出土



玄室 左奥



玄室 右奥



玄室 左壁



玄室 右壁



玄室 遺物出土 (南東から)



調査後全景



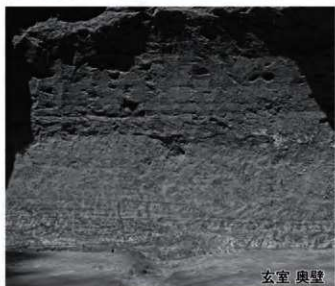
玄室 断面 (南から)



玄室 左壁



玄室 右壁



玄室 奥壁



遺物出土 (南東から)



遺物出土 (東から)



玄室左奥 周溝確認



玄室右袖 周溝確認



玄室右袖 遺物出土



ST-013 (南側から)



ST-013

(東から)



ST-014 (南東から)

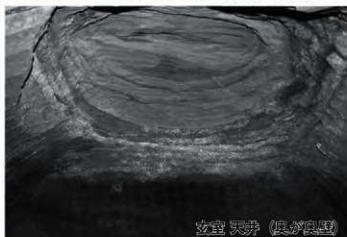


ST-014(1)

閉塞状況



玄室 (入口から)



玄室 天井 (奥が奥)



玄室 左側



玄室 右側





南西側台地頂部（北東から）



北東側台地頂部（南から）



土砂調査状況（調査地点から）



ローリングタワー設置状況（ST-010）



調査状況（南西から）



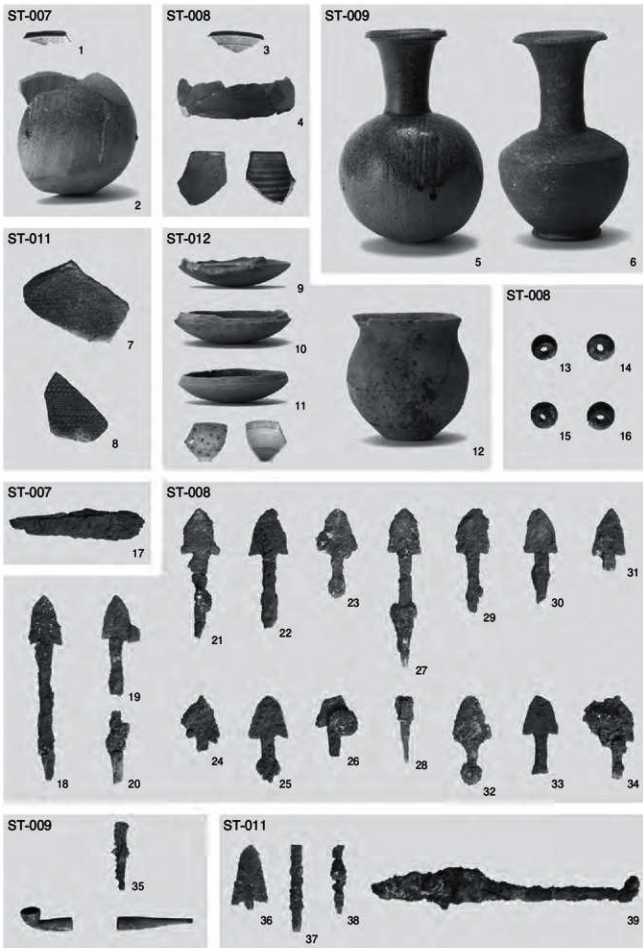
調査状況（北東から）



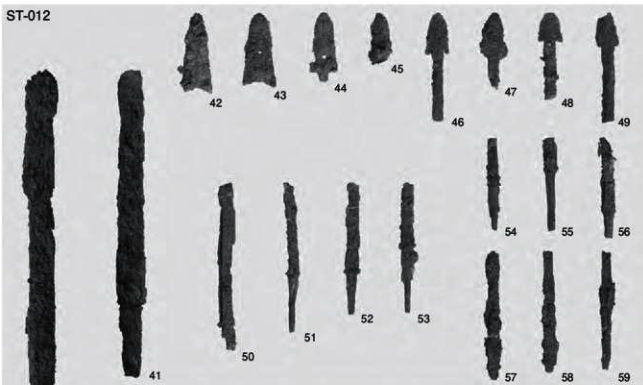
鉄釘取上げ作業（ST-012）



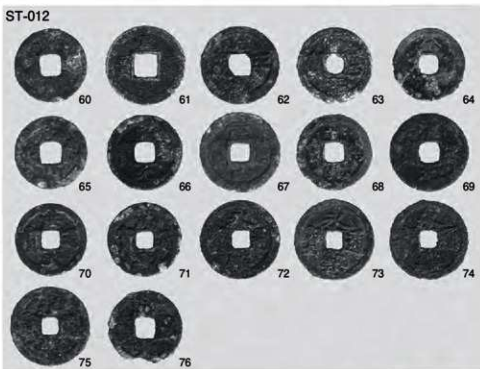
フルイ掛け作業



ST-012



ST-012



報告書抄録

ふりがな	とうがねしたまさきじんじやうらよこあなぐん(2)							
書名	東金市玉崎神社裏横穴群(2)							
副書名	東金市田間2地区土砂災害防止事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	黒沢 崇							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2014年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
玉崎神社裏 横穴群(2)	東金市田間 22146 ほか	12213	028 (2)	35度 34分 09秒	140度 22分 03秒	20130201 ～ 20130322	横穴6基	急傾斜地土砂災害防止事業
				世界測地系 WGS84				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
玉崎神社裏 横穴群(2)	横穴	古墳時代	横穴6基		土師器・須恵器・ 鉄製品・石製品 中近世銭貨・陶磁器		調査した横穴のうち の1基から6世紀代 にさかのぼる遺物が 出土し、山武郡域で は最古段階の横穴構 造が明らかとなった。	
要 約	古墳時代後期から終末期の横穴6基を対象に発掘調査が実施された。周辺地域通有の高壇式構造の横穴が主体である。玄室は小型のものが多く、天井形態はアーチ形とドーム形である。各横穴から遺物が出土し、横穴の年代や変遷を検討する上で貴重な成果を得た。6基の内1基は玄室が無高壇で排水溝を有し、鉄刀・鉄鎌・土師器坏などの副葬品が豊富に出土しており、横穴形態・遺物年代観から考えて、山武地域の横穴の中で最古段階に位置づけられる。							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第3集

東金市玉崎神社裏横穴群(2)

—東金市田間2地区土砂災害防止事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成26年3月25日発行

編集・発行 千葉県教育委員会
千葉県中央区市場町1-1
印刷 三陽メディア株式会社
千葉県中央区浜野町1397
